沖を行く船

えれきてる

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
沖を行く船

【Ｎコード】
Ｎ８５１６ＥＲ

【作者名】
えれきてる

【あらすじ】
俺たちは来年から社会に奉仕する立場となり、人々の幸せのために身を粉にして働くことになる。もちろん、俺たちは各人の立場で一流の仕事をして、社会の大いに貢献するであろう。
そんな俺たちは、学生時代の最期の秋に、究極の祭りをすることを思いついたのだ。

人類にとって、もっとも大切な存在。
生命力・生殖能力が最高の美少女を生贄として血祭りにあげ、俺た

ちの青春に別れをつげるのだ。
この祭りの間は、社会の価値観が逆転する。

千人の候補者の中から生贄に選ばれたのは、県下一の進学校へ通う高校一年生の泉ちゃんだった。

クラシックバレエと陸上で鍛えられた引き締まった細いボディに、急激に発達した乳房を持ち、鼻筋が通った優し気な可愛らしい顔をしている娘だ。趣味のオペレッタと高校の合唱部で鍛えられたソプラノの美声が悲鳴となって船内に響いた。

拷問の舞台は日本海上に浮かぶ船の中。
泉を苦しめるためのあらゆる設備が整っているばかりか、できるだけ長く生き続けられるように医療機器もそろっている。

一人の少女が、六人のサディストに嬲られつづけるだけの話です。

プロローグ

生物学的に最も大切に守られなければならない存在、種の保存のために重要な役割を担う者、それを傷つけることは人道的にも許されることではない。若い女性、生命力にあふれ健康で美しく、勤勉でやさしく、健気で清楚な。子を何人も生む潜在能力を持ち、よき母となり、美しいまま年を重ねるだろう美少女。

そんな人間の絶対的な価値観を凌辱し、引き裂き、破壊しつくす。それが究極の祭り。船上の謝肉祭。

俺たちの社会人への羽化を祝う祭りが始まろうとしていた。

第1話　生贄の選考（前書き）

生贄となる女性の最終選考会の模様です。

第1話　生贄の選考

ホワイトボードにはA四版に印刷された女性の写真が五枚、マグネットで止めてある。どの女性も女優かと思うくらい美人であった。それもそのはず、祭りの生贄候補千名のうちから選ばれた五人だ。容姿だけではなく知性、体力ともに優れた女性たちだった。この最終選考に残った五人には、それぞれ探偵をつけて身元・身辺の徹底調査が1年以上かけて行われた。それを受け、一週間の審査を俺たちが行ったのだ。

五枚の写真のうち、三枚がマグネットを外され床に散らばった。その上を歩みながら、神田さんが言った。

「残り二人の中から、最終候補を選ぶわけだが、どちらが良いかは決まったようなものだな」

他のヤツらもうなずく。

それはそうだろう、ここの集まった六人のうち五人がその子が良いと言うのだから。

「残る一人は、この子の確保に失敗した時の保険だ」

神田さんの太い声が響く。ごつい体をした神田さんは、この祭りのオーナーだ。神田さんは、補欠となった二枚目の写真を外してケースにしまった。　床にバラまかれた写真には、神田さんの靴跡が付いている。それらは、ゴミ箱行きだろう。

ゴミ箱に入れられた女たちは、むしろ幸運に違いない。選定会議まで残ったいずれ劣らぬ美貌を持った女性であることは間違いなし、これからも幸せに生き続けられるのだから。

俺はプロジェクターを作動させ、ホワイトボードの横のスクリーンに動画を映し出した。探偵に調査させた候補者が映った画像だった。

「さて、全国の美女たちから最終的に選ばれた不幸極まりない女性

は、宮田　泉ちゃん、N県N市の高校に通っている一年生だ。父親は内科の開業医、本人も医学部を目指して勉強に励んでいる。趣味はクラシックバレエとオペレッタ、クラシックバレエは高校入学と同時に教室を辞めている。中学のサークルは陸上部、中二までは短距離の県大会上位にいたが、中三では振るわなかった。高校に入ってからは合唱部に所属している。パートはソプラノ……」

神田さんの説明を聞きながら、俺は宮田泉ちゃんの画像を見つめた。鼻筋が通っていて聡明な印象を受けるが、優し気な眉の下に二重まぶたの大きな瞳が、やがては優しいお母さんになるのではないかと想像させる柔和な暖かさを感じさせた。友だちと談笑している表情はクルクルとよく変化して情感の豊かさを感じさせた。

体育の時間の画像には柔らかそうな髪を三つ編みにして微笑んでいる姿があった。ほっそりとしたシルエットが印象的だが、ホットパンツから出ている太ももは十分に肉厚に見えセックスを感じさせる。

「……で、あるから、文武両道の美少女というわけだ。章一君、医師の卵として補足を頼む」

神田さんは、俺の顔を見ながら日焼けした四角い顔に白い歯を見せた。

「はい、雇った探偵の調査だと、中学の時の学力テストでは県下十位以内に入っていたそうで知能の高さがうかがえます。趣味、スポーツにも同時に打ち込んでまずまずの成績を残しています。これは精神力の高さを示しており、ストレスに強い精神の持ち主だと言えるでしょう。理系分野も苦手としていませんので理性的な感情の持ち主であると考えられます。過激な拷問で精神崩壊しにくいでしょう」

室内がざわついた。

俺はつづける。

「中三まで通っていたバレエ教室を辞めていますが、これはバストの急激な成長と関係があると考えられます。調査の結果、中三春に

購入していたブラのサイズはＡ６５だったものが中三夏にはＤ６５となり、秋には通販でラージサイズ、Ｅ６５を購入しているようです。それに中学三年の陸上の記録も下降気味なことにも関係しているでしょう」

動画は、彼女がハードルを飛び越えるシーンになっている。長い足をいっぱいに伸ばし軽やかに走り抜ける彼女の胸には、確かに大きな乳房が揺れているのがハッキリと映っていた。

チラリと田中の顔を見る。奴は細面の骨ばった顔をほころばせ立ち上がると言った。

「幼過ぎると思ったが、そんなに乳房が発達しているならいいな」

田中は、グラマー美女が好みで唯一違う女、ミスＮ大学を押していたのだ。

「十五歳という年齢ですが、女性の場合、生命力が最も高くなるのが十五・六歳と言われています。体力は十八・九が高いですが、過激な責めでも死ににくいという点では十五歳くらいが最も適しています」

長身の田中がうなずくのが見えた。これで、全員、一致でこの娘を拉致することに同意したことになる。

つづいて、中三の冬のバレエ教室の発表会のシーン。スレンダーな白いバレエ衣装では急激に発達した乳房を隠し切れていなかった。清楚な白い姿に胸だけがやたらセクシーに見える。

つづいて、オペレッタの画像。彼女の可愛らしくも力強い声が会場に響いている。

「バレリーナの細い体に、この巨乳とはたまらないな」

「大人しそうだが芯が強そうだ」

「声もいいよな。ソプラノの悲鳴が響くことになりそうだ」

みんな好き勝手なことを言いながら、興奮を抑えようとしているのが解る。　俺も喉が渇いていないのに喉が出てもいない唾液を飲み込む。股間のものも固くなっている。

「オペレッタと合唱部で鍛えられた声帯は、多少の悲鳴を上げ続け

ても、声が枯れることはないでしょうし、枯れたとしても次の日には回復するでしょう」

他の五人の男たちから拍手が上がった。

「最高の祭りにしような。君たちの門出の準備だ」神田さんが言うと、みんなからオーッと声が上がった。

第2話　看護師　朋子

拉致は専門の業者に依頼すると神田さんは言った。

俺の方は、生け贄、宮田泉ちゃんの世話をする看護師を調達する仕事を依頼されていた。泉ちゃんは、普通なら一時間と持たないくらい激しい拷問を受けることになる。それを出来るだけ延命し、長く苦しむ姿を鑑賞できることが期待されていた。そのため、考え得る限りの医学的処置をほどこす予定であるが、それを補佐する看護師を雇う必要があった。

もちろん、口が堅く、多額の金につられて犯罪に手を貸すほどの事情を持ったヤツが望ましい。俺は医学部と看護学校の合コンで知り合った伊藤朋子に目をつけていた。電話で大まかな話をすませ居酒屋のボックス席で落ち合った。人に聞かれたくない話をするには騒がしい方が都合がよい。

朋子はワンピースに人工真珠のネックレスで現れた。それなりにめかし込んで来たのだろう。細く貧相な体つきには似合っていると思ったが、セクシーとは言い難い。

「まさか、真野さんと二人きりで飲めるなんて、わたし、夢のようです」

細い目をさらに細めて朋子が言った。

「別にデートじゃないさ、ビジネスの話だ。大まかなことは電話で話した通りなんだけど、質問はあるかい?」

「質問は大ありですよぉ」

朋子は身を乗り出した。

こんな子だったかな、もっと大人しい子だと思ったけど。二人だけで落ち合ったことで少しハイになっているのだろう。どこにでもいる十人並みの容姿で貧乏くさい格好をしていれば、男と縁がなくても不思議じゃない。

「まずは、何か頼もう。とりあえず生でいいね」
朋子はうなずくと、上目づかいに俺の顔を見ながら言った。
「あの話、ほんとうのことですか？」
「ああ、半月で三百万円だ。悪くないだろ」
「違います……犯罪というか……殺人でしょ……」
「いや、発覚しなければ犯罪にはならないよ。ただの蒸発事件が、僕らの縁のない土地で起こるだけだ」
「それはそうですけど……こわいです」
「シッ」
俺は唇に人差し指を当てた。
店員がジョッキを持ってくる。
店員が去ると俺は言った。
「三百万円といえば、看護学校を卒業して一年間働いても手にできない金額だ。君の借金を調べさせてもらったけど、蒸発した親父さんの借金をかぶって約三百万円あるじゃないか、それに奨学金を返すとなると、まじめに働いても四十近くになるでしょ。替えし終わってから結婚なんてできないよ。君の一生は苦しむだけで終わりだよ。良いの？」
朋子は目を伏せながら言った。体が震え、顔が青い。
「で、でも、拷問って……そんな……人を殺すなんて……」
「君の優しい心は解るし、まともな人間なら、恐ろしくて尻込みするのも当たり前だと思うよ。だけど、ものは考えようさ。君は自分が何も悪くないのに親父さんの連帯保証人にされて裏切られた。まじめに勉強していたのに、親に金も出してもらえず奨学金も返さなければならない。その反面、生まれたときから何不自由なく暮らして容姿端麗で頭も良い女もいる。不公平だと思わないかい？　それをちょっとだけずらすと考えると良い。君の不幸の分だけ、まったく関係ない幸福な子に不幸になってもらうんだ。そうすれば、君はまっとうな暮らし、当たり前のくらし、この世に生まれて平均的にもっているだろう程度の幸運をつかむことができる。ただ、それだ

けのことさ」
「でも……」
朋子は目をそらしうつむいた。
もう一押しだ。
「それにすばらしいのは、君が看護の仕事に打ち込めるようになることだ。借金を背負って、いくら働いても結婚も出来ず人並の幸せを手に入れることができないという事実があれば、どんなに献身的に患者さんにつくしても、やっぱり不幸は伝わってしまうものだよ。そんなものを背負って看護師をしていても患者さんまで不幸にしていまう。君は卒業すれば、看護の道へ進むのだろうけど、優しい君なら多くの患者さんのお役に立てて、みんなを幸せに出来るだろう。だけど、それには自分の力で幸せをつかまなければならないよ。それは、生半可なことじゃない。まじめに生きているだけじゃ駄目だ。危険を冒して怖い思いをしなきゃ手に入らないよ。それが君が払うべきコストだ。勇気をもって生きないと多くの人を幸せになんてできないよ」
「な、なにか、詭弁っぽいって言うか……」
朋子の顔があがらない。
「詭弁かもしれないな……人は怖いこと、危険なこと、一般的には悪だと言われていることをなすときは、ある程度自分をだまさないといけない。例えば、戦場で戦う兵士なんてそうだろう。自分と同じくらいの若者を敵として殺さないといけない。そんなとき、詭弁でもいいから正義をかざし、国や家族を守るために戦うと誓うんだ。でも、君は兵士と違って、実際に病気や怪我で苦しんでいる人を救うことができる。たった一人の少女を犠牲にすることで多くの人をほんとうの意味で救えるんだよ」
「あ、あの……」
朋子の顔があがった。
「もし、私が断ったら、私、殺されちゃうんですか?」
「ああ、ごめん……怖いよね。殺されることはないよ。断ってくれ

てもかまわない。口止め料として三十万円払おう。君は墓までこの話を持っていってくれれば良い」
「信じられません。このまま、警察に行くかもしれませんよ」
「大丈夫だよ。警察でこんな話を信じるものか。君を怖がらせるための作り話さってことで済むよ」
朋子は下を向いて何かを必死で考えているようだ。ふっと顔を上げると「終わったら私はどうなるの？」
「君は殺されることはないよ。僕らは自分と接点がある人間を始末したりはしない。君がいなくなれば、合コンで知り合った僕も少しだけ疑われるかもしれない。そんな小さな危険すらも犯す気はないよ。君は三百万円とボーナスを持って帰れば良い」
「ボーナスですか？」
朋子の目が輝いた。
「そ、ボーナス。その子が一日生き残ったら十万円のボーナスを払う。一日でも拷問を長引かせて楽しみたいからね」
それに……と、俺は付け加えた。
「君の看護師としての経験値もずっとあがって、すばらしい仕事が出来る人間になれると思う」
朋子はうなずくと、「やります」と俺の手をにぎった。

第3話　奈落への航海

暗いコンクリートの壁を背景に、逆エビ型に吊るされた女の腹からひものようなものがぶら下がっていた。小腸だった。腹が縦に裂かれてそこから小腸が飛び出しているのだ。

毛糸の帽子を顔全体を覆うようにかぶり、目と口だけ出した男が、女の豊かな金髪をつかみ顔を上げさせた。女は低くうめき、口からは粘っこい血が糸を引くように滴り落ちた。

「この男が俺だ」

神田さんがスクリーンを指さして言った。

スナッフ動画に写された白人女性の処刑シーンだった。

女性は絞り出すように何かを言っている。

『オゲ……ミニャ……オゲ……ミニャ……』

「なんて言っている？」

「英語で言えば、『キル　ミー』、殺してくれと言っている」

俺たちは、神田さんのクルーザーで横浜を出港し、太平洋を南下していた。

その船内で、スナッフ系の動画を鑑賞していた。やがて行われる祭りの前の練習……特に看護師として雇った朋子に慣れてもらうためと言う大義名分もあったが、ほんとうは自分たちの退屈を紛らわすことの方が大きい。

車での移動は、道路上のカメラに捕らえられる危険があるので、船を使っているわけだ。俺たちは、祭りの会場である日本海へ向かっている。

七日かかるのんびりした航海の間の暇つぶしだった。

スクリーンの中の半死半生の女はロシア人の少女だ。ロシア語の

優し気な響きが哀愁をそそった。動画に移っている神田さんが日本語で『俺をイかせたら、首を落としてやる』と言うと、傍らから通訳らしい男の声が聞こえた。

神田さんは、ロシア人の少女の口に無理に突っ込むと、その頭を抱えて腰を振り始めた。相手が人間でなくまるで物のような激しいピストン運動だった。

神田さんは腰の動きを止めると『全部飲め、それが出来たら殺してやる』と言った。すぐに通訳される。ペニスを抜くと女は弱々しく咳込み、精液と血が混じった粘液を唇から滴らせた。

『だめじゃないか、これでは殺してやるわけにはいかないな』

神田さんは、注射器を彼女の乳房の下に刺した。

「あれは？」

「覚醒剤さ。興奮状態にして、失神できないようにたまに注射していた。痛みが緩和されるところがやや難点だな」

俺はうなずくと、今度の祭りでは、覚醒剤より良い薬が用意できたと思いながら、スクリーンに目を移す。

覆面姿の神田さんは、小腸を引きづりだし紐のように女のウエストに巻き付けた。薄いゴム製の手袋をはめスタンガンを握ると、女の開いた腹腔内に突っ込んだ。

女は激しく体を痙攣させて悶え苦しんでいたが、やがて口から赤い泡を吹いたと思うと動かなくなった。

朋子が口を押え、部屋の外へ駆け出して行った。

俺は後を追うと、朋子はデッキへ出て船べりから頭を海へ突き出し、海面へ撒餌をしていた。

「大丈夫か？　そんなことでは困るぞ。あんなものには慣れてもらわないと……」

「少し気持ちが悪くなっただけ、船酔いもあると思う……慣れれば

大丈夫よ」と朋子は息を荒げながら言った。
「本番は、あんなものじゃないよ。血や体液の匂いもするし、悲鳴も生だから」
「大丈夫。女は血に慣れているし……同情なんてしないわ」
「それならいいが……むしろ、今、人間的に素直な反応をしておくことの方が大切かもしれないな。やがては無感情で淡々と仕事ができるようになる。生贄の少女を責めるのはあくまでも俺たちで、君はその子を生かすことだけを考えていれば良い」
朋子は水平線のかなたを見つめるような目でうなずいた。

船旅はつづく。瀬戸内海から関門海峡を抜け隠岐の島沖を通った。能登半島の北方を抜けると目的地はもうすぐだ。
佐渡島の島影と、その手前に貨物船のシルエットが見えた。あの船が目的地らしい。祭りのために用意された貨物船。一人の少女をいたぶるためだけに公海上に浮かんでいる牢獄だ。
各種拷問具はもちろん、彼女の延命のための治療器具や薬品類も揃っているという。この祭りのために何億円……いや、何十億円かけているのだろうと俺はブリッジで操船する神田さんを見ながら思った。
公海上で行う以上、治外法権なので警察の関与の心配はいらない。証拠は粉々にして海に廃棄すれば消滅したと同じだ。そんなところでは何でもやり放題じゃないか。
俺たちのようなサディストには天国でも、その犠牲者には地獄、いや地獄の方がまだマシ……奈落の底のさらに下であろう。
クルーザーが貨物船に接舷すると、男が二人乗り込んできた。
「では、よい船旅を」と言い残して彼らは俺たちの乗ってきたクルーザーで離れていった。
俺と神田さん、他の仲間四人と朋子は、貨物船に残された。
「みなさま、晩餐の用意が出来て御座います」
その声に振り向くと、太ったコック姿の中年男がかいがいしく頭

を下げていた。

第４話　前夜祭

空の貨物船を改造した船内は広かった。
小さな体育館ほどある部屋のテーブルの上に豪華な食事が並べられてあった。立食パーティーの会場のようだ。
神田さんが白ワインが注がれたグラスを手にすると「まずは前夜祭だ。生贄がもうすぐ届くので飲み過ぎないようにな」と言った。
俺たちは思い思いに料理を皿にとった。
「うちのコックは肉料理がうまい。牛の解体からやれるのだからな」と神田さんが言った。
この船に乗ったのも彼の趣味なのかもしれないと俺は思った。
祭りに参加する仲間は俺を入れて六人だった。
まずはオーナーの神田さん。病院をいくつも経営している実業家の父を持つ。真性のサディストで海外ではかなり人を殺めているらしい。この祭りの首謀者だ。がっちりした体格は空手で鍛えたものだと言う。
俺は、真野章一。こんど医学部を卒業して外科医として働く。家は裕福で医者などで稼ぐ必要はないのだろうが、遊んで暮らすのもつまらないので、人体を切り刻める職業につくことにしている。もちろん、病気やケガで苦しむ人を救える喜びも味わいたいからだ。
グラマー美女好きの田中は、多くのビルを持つ不動産会社の社長の息子だ。大学では経済学を専攻していた。頬骨が目立つほど痩せた顔立ちで、長身。趣味はマラソンなのだが、美女が喘いでいる姿を想像しながら走るとタイムが上がると言っている。
この三人がメインスタッフとなる。
あとは、乗っかってきた友人たちだ。
岩倉は神田さんの空手部の後輩でガッシリした体格。女をぼこぼこに嬲るのが夢だと言っている。通称パンチ。

加藤は小柄で貧相だが、電気工学が得意分野で、電気が人体に与える影響について興味があるらしい。通称ネズミ。

猪熊は太った丸い体つき。食欲旺盛。巨乳好きで乳房への責めを好む。通称フトッチョ。

あと、この船に乗り込んでいるのは、コックのおっさんと、看護師の朋子、まだ見ぬ船長だけだ。俺たちは談笑しながら生贄の到着を待った。

館内放送のスピーカーが鳴った。

「船長の富樫です。接舷を求めている船が近づいてきます」

神田さんが「いよいよ来たか」とみんなに甲板に出るように言った。

甲板に出てみると、漁火が点々と水平線のあたりに見えるだけだった。

「あっちだ」

田中が指を指した方向に漁船のライトが光っていた。

漁船が舷側に取りつくと、タラップが降ろされた。

肩に袋を担いだ男を先頭に二人が甲板に上がってきた。

袋が丁寧に甲板に置かれると、もう一人の男が何かを言った。中国語らしい。

神田さんがそれに返事をして俺たちの方を向いた。

「袋の中に少女が入っている。開けてみてくれ」

田中が袋の紐をとき、寝袋のようなチャックを下すと、中から写真や動画で見慣れた宮田泉の姿が現れた。

その寝姿は月の光に照らされてわずかに光っているように見え幻想的ですらある。死んでいるのかと思うほど安らかな顔をしていた。

俺は思わず彼女の鼻の下に指をかざし呼吸を確認したくらいだ。

「生きているか?」と田中が言った。

俺はうなずく。

彼女は白のブラウスにチェックのスカートをはいていた。まぶしいくらいの白い太ももがのぞいている。学校帰りに拉致られたのだ

ろう。傷つけないようにすぐに睡眠薬で眠らされたようで、拉致業者の手際の良さが空恐ろしく感じた。

中国人は渡されたアタッシュケースの中を確認すると神田さんと握手を交わした。アタッシュケースの中にはびっしりと元の札が詰まっているように見えた。

魚船は舷側を離れ、夜の海へ消えていった。

仲間たちは、泉ちゃんを囲んで口々に勝手な感想を言い合っている。

「写真で見るより数倍きれいな子だな」

「さわるのが怖いくらいだ」

「清純そのものだな。オナニーくらいはしているのかな」

「こんなにかわいいけりゃ、周りの男はほおっておかないだろう、意外とヤリマンなんじゃないの？」

「いや、かわいすぎると手をだせないものだよ。というか身辺調査はしてあるけど、勉強やスポーツ、芸術に打ち込んでいるお嬢様さ」

「身辺調査だけではわからないこともあるから、これから彼女の身体検査を行う。パーティ会場へ運んでくれ」と神田さんが言うと、田中が彼女を抱えて降りることになった。

パーティ会場の中央のテーブルの料理がかたずけられており、白いテーブルクロスの上に泉ちゃんを寝かせた。白くきめ細かい肌は、さわらなくとも弾力が伝わってくるような生命力を持っているように思えた。

「どうだ。真野くん、医師としての感想は？」

神田さんが俺に聞いた。

「肌の張り、つやから言って、完全な健康体とそれを保持する生命力を感じます。人間の体をもっとも単純にモデル化すると、水溶液が詰まった皮の袋です。水溶液のバランスがくずれると外側の皮の部分にも弊害が現れますが、それがまったくありません。思春期の頃には代謝が過剰になりやすくバランスがくずれてニキビなどが出やすいのですが、彼女の場合はそれがまったくない。規則正しい生

活と、バランスのよい食生活、精神的充実、持って生まれた美貌がすべて揃っていたのでしょう」

と俺が言うと、全員がうなずいた。

「それでは、身体検査をはじめよう。服を脱がせてくれ」と神田さんが言った。

第5話　泉の身体検査

部屋の中央のテーブルをみんなで囲んだ。照明が寝かされている少女の体を明るく照らす。安らかな表情で眠っている少女の顔は、柔らかそうな光を反射している。白いブラウスがまぶしい。

俺はゴクリと喉を鳴らすと、まずはスクールシューズを外しにかかった。陸上部の選手だったとは思えないくらい小さな足だ。白いハイソックスを脱がすと、小さなピンク色の爪が乗った指がきれいに伸びていた。足の指先まで美しい子だと思った。

「俺、もう立ってきちゃった」フトッチョこと猪熊が四角い鼻の穴を膨らませながら言った。

金尺を伸ばし身長を測定する。百五十七センチ……平均くらいの身長だ。

バレエ発表会の動画を見たが、ひとりだけ細く絵になっていたことを思い出した。すらりとした細い体だがブラウスの胸のあたりがきれいに盛り上がっている。のボタンを外し胸をはだけた。純白のブラジャーに包まれた胸が現れ、双丘の谷間がのぞく。清楚なイメージのブラウス姿とそれをハダケタときに匂いたつような色気のギャップに鼻の奥がツンとくる。ブラを取ると、あふれんばかりの乳房が現れた。乳首の透き通るような薄いピンク色が幼さを感じさせるが、ボリューム感に圧倒された。清純派アイドルのシャツを脱がすとグラビアアイドル、ブラを取るとＡＶアイドルと言ったところか。

朋子がサイズを読み上げる。

「こんなきれいなオッパイはみたことがない。乳首は子供色だが、乳房が大人だ」とフトッチョが叫んだ。

「Ｅの六十五ですね。めずらしいサイズです。トップバストは八十五センチということになります」六十五はもっとも細いサイズであ

るため、普通の店で売っているのはDカップまでなのだそうだ。
「電気を流すとどうなるか楽しみです」とネズミのような前歯を光らせて加藤がめがねをかけ直す。
「ボコボコになるまでなぐりたいね」とパンチ岩倉が正拳付きの型をしてみせた。
スカートを外す。
純白のパンティーは色気はないが、そこから伸びる引き締まった太ももは、若者らしい俊敏さを感じさると同時にエロティクな曲線を描き、思わず唾を飲み込んだ。
「スカートのウエストは五十八を絞っていますね。ウエスト五十六くらいでしょう」と朋子が言うと、みんなからため息が漏れた。
「細いな。細くて巨乳とは最高の素材だ」と田中は細い目をさらに糸のように細めた。
朋子は手早く巻き尺を回し腰周りを測る。
「ヒップは八十二センチです」
「まだ、発展途上と言うところか。学生らしく締まっている。こういう尻は叩き我意があるんだ」と神田さんが言った。
身長百五十七センチ、スリーサイズは上から八十五・五十六・八十二、スレンダー巨乳タイプということになる。
自分の鼓動が早くなり呼吸の感覚も短くなってきた。ペニスも痛いくらいに勃起しているのを感じる。
パンティーをむしり取った。陰毛はまだ生えたてと言った感じで、産毛に色が付きだした程度だった。初潮はあっただろうが、凌辱や輪姦はかなりの肉体的苦痛を与えるだろう。
「かわいい割れ目だ……まだ処女だろうが調べてみてくれ」と神田さんが俺に目配せをした。
「足を開かせてくれ」俺は朋子に言うと、ネズミが手伝って両足を開かせた。盛り上がった大陰唇にふれると、思っていたより柔らかく、しかも弾力があった。バレエや陸上で鍛えられた下半身と女性としての皮下脂肪が理想的な手触りを生み出しているのだ。

指で開きピンクの肉色に光る小陰唇を露出させる。さらに膣口へクスコを当て中をペンライトで照らした。

少女の秘部の奥には発達したヒダが光っている。

「ヒーメンは無事です。処女ですね」と俺が言うと、仲間たちは代わる代わるペンライトで中を観察した。

「こんなにマジマジと処女膜を観察できたのは初めてだ」「意識があった方が面白かったのにな」「これを残酷な方法で引き裂いてやりてえ」などと勝手なことを言っている。

「まずは処女のまま、拷問に架けてやろう。最高の贅沢だろ」と神田さんが言う。

「そうですね。泉ちゃんの処女喪失は、最大級の苦しみの中で行われるのが理想ですね」と俺も、呵責の方法を思案しながら言った。

その後、血液を採取し健康時の血液成分やホルモンバランスを測定した。これは拷問終了時に速やかに血液内の成分を健康時と同程度に戻す治療を施すためでだった。ストレス物質やショック時のホルモンなどを除去・中和させ、次の日の拷問までに健康な状態を取り戻させるのである。

「せいぜい、今夜のうちによい夢を見ておくことだな」

神田さんが泉ちゃんの寝顔を横目で見下ろしながらニヤリと笑った。

第6話　拷問の始まり

大粒の涙が大きな目から頬を伝って流れ落ちる。泉が泣き叫ぶ声はソプラノの悲鳴となって船内にこだました。

「い、いたいっ！　やめっ、やめてっ！」

「良い声で泣くなぁ」

泉はネズミとフトッチョに腕をねじり上げられ押さえつけられていた。いくら抵抗しても少女の細腕では、何の効果もない。

パンチは笑いながら、泉の腹を殴った。ウッと声を詰まらせてうつむく泉。

「俺は腹パンの方が好きなんだよね」

パンチが気持ちよさそうな笑顔で言った。

泉の唇から一筋の血が流れているのは、パンチが頬を張ったときに切ったものだ。どんなことがあっても顔を殴らないように神田さんに注意を受けたのでそれ以来、顔を殴ることはない。

「血反吐を吐くまで腹パンしたいな」

パンチは泉の髪の毛をつかみうつむいた顔を上げさせた。

「許してください……」

視線が定まらない大きな瞳で泉は哀願するように言った。本人にしてみれば、なぜ、自分が殴られるのか、なぜ裸なのか、なぜ知らない男に囲まれているのか、ここはどこなのか、まったく分からないだろう。

とりあえず、突然襲った暴力から、逃れたい一心で謝っているのだろう。

「お前は、俺たちのおもちゃなんだよ。やめてとか、どうしてとか、おもちゃが聞くか？」

パンチは、容赦なく泉の腹に拳を入れた。

「ぐえっ、ゴホッ、ゴホッ」

泉は、吐き気を押さえながらせき込んだ。
「ごめんなさい、ご、ゴホッ、ごめんなさい。大人しくしますから、痛くしないで……」
生まれてこの方、殴られたことなどないのだろう。経験したことのない痛みと恐怖に襲われているのだろう。しかし、痛くしないでとは出来ない相談だった。
「よし、よし、いい子だ」
泉は、震えながら及び腰で言われたとおりに腕を前に掲げた。手首に太い皮ベルトをまかれベルトに鎖がつながれる。鎖が激しい金属音を起てながら天井の滑車に巻き上げられた。
泉は万歳をした格好で、足がつま先立ちになるくらいまで吊り上げられた。
「いたい、腕がいたい」
「少し我慢してな。すぐ済むからね」
田中が長身の体を丸めて泉の足下にしゃがんだ。
パンチもそれにならい、泉の左足をつかむ。金槌が釘の頭を叩く音が響いた。
「きゃあぁぁぁっ！」
ソプラノの悲鳴が上がった。
泉は自由な右足を振り回し、それが足下の田中とパンチの体に当たるが二人は作業を続けていた。
さらに釘を打つ音が聞こえた。
「あああっ！　な、何をッ、いやあああああっ！」
釘の頭を連続して叩いていく。泉の足の親指の爪の上から釘を打ち付けているのだ。釘は爪を割り指を貫通し、床に敷いてある板に食い込んでいた。
泉は目を見開き何とか痛みから逃れようと体を痙攣させるがつま先立ちに吊り下げられていては、むなしく体を揺らすだけだ。それどころか、打ち付けられた親指の爪により一層、釘をめり込ませることになる。

「いやあああっ！」

泉のしぐさをみて、俺と神田さんの目が合って思わず微笑んだ。

泉は、自分の感じる激痛の場所を見てみたかったのだろう。しかし乳房が邪魔をして見えないのもだから、首をかしげてから、釘がめり込んだ爪を見て、一拍遅れて悲鳴を上げたのだ。そんな仕草に、俺のペニスは限界まで充血し、泉の破瓜は今しかないのではないかと思った。

神田さんは、そのことを感じたのか、俺の胸に腕を伸ばし通せんぼをした。

「あせるなよ、章一君。まだまだ、準備運動だ。もっとも、準備運動のうちに死んでしまうかもしれないが、そうならないように頼むよ」と片目をつぶって言った。

確かに処女のまま、できるだけ拷問してやるのも面白いと思う。セックスだの破瓜だのそんなものは拷問のデザート、添え物、刺身のつまのようなものだろう。

左足もパンチとフトッチョに抑えられ、同じように釘を打ち付けられてしまった。泉は、天井からつま先立ちに吊るされて、足の両親指を床に打ち付けられたのだ。

そんな泉ちゃんの姿は美しかった。バレエで鍛えられた細いがしっかりした足首が、つま先立ちに芸術的なバランス美を与えているのだと思った。

「ふぇえええぇ……、ど、どうし……て……えっつえうぅ」

経験も想像もしたことのない痛みに泣きながら混乱した泉は体を震わせて耐えるしかないのだ。

田中とパンチが竹刀を振り回しながら泉の両脇に立った。

神田さんが「胸！」と叫んだ。

田中の竹刀が風切り音を発し、泉の乳房に当たった。

「きゃあああああっ！」

手首に食い込む皮ベルトと、爪を割り打ち付けられた足の指の痛みで身動きがとれないところへ新たに加えられた女の急所への一撃

だった。
さらに、神田さんは「背中！」と叫んだ。
パンチの竹刀が泉の背中に炸裂する。
「きゃあああああああっ！」
「胸！」
さらに激しい竹刀の炸裂音が響いた。興奮で力の制御が甘くなっていくのだろう。
「腕！」
しかし、腕ではなく腰を竹刀が打った。
指示がないうちに泉の胸に竹刀が下から打ち上げる。
「背中！」二本の竹刀が同時に背中に当たる。
「足！」
「胸！」
「足！」
「胸！」
「胸！」
「胸！」
「腹！」
「尻！」
「腰！」
「腕！」
「胸！」
「胸！」
「胸！」
「腹！」
「尻！」
……
「足！」
「尻！」
「胸！」

「胸！」
「腹！」
「尻！」
「腰！」
「腕！」
「胸！」
「胸！」
「足！」
……
「腕！」
「胸！」
「尻！」
「胸！」
「胸！」
「胸！」
……

不定期に示される部位と、示された通りに打つとは限らない気まぐれな打ち手によって、指定される恐怖、肩透かし、予想できない部位に激痛……そして、本能的に身動きしようとすると襲う釘とベルトの痛み。

幸せな生活から、突如として投げ出された地獄で身動きすらできずに悲鳴を上げ続ける泉の姿に俺は射精寸前まで上り詰めていくのを感じるのだった。

第7話　失神と覚醒と

田中の力任せの一撃が泉の背中を叩いた。小気味良い音が響く。泉は天井を見上げるように仰け反り、ビクンビクン！　と全身を大きく痙攣した。全身の力が抜けるようにうつむき体重が両腕にかかった。股間の割れ目から小水が滴ったかと思ったら、それは一条の線となって床をぬらした。田中が泉の髪をつかみ顔を上げさせると、目をつぶったまま口から泡を吹きだしていた。

「やべぇっ」とフトッチョの声がした。フトッチョのペニスの先から精液が吹き出している。

「ちんぽにさわることなく射精しちまったよ。こんなことは初めてだ」とフトッチョが言った。

「おいおい、まだ、始まったばかりだぞ。もったいないな」と神田さん。

「俺も爆発寸前だった。何から何までカワイすぎるよ」とパンチが額の汗を拭きながら言った。

「顔もスタイルも良いけど、声がたまらんね。アニメ声っての？」とフトッチョがペニスをさする。フトッチョのペニスは、また、固さを取り戻し上を向いてピクついていた。神田さんのもったいないは取り消さないといけないなと俺は吹き出しそうになるのを堪えた。

「何発食らわした？」と神田さんが聞くと、ネズミがパットを見ながら答えた。

「田中さんが五十三発、パンチが五十六発です。部位別だと、乳房四十五回、左二十四、右二十一、背中二十四発、ヒップ二十二発、ウエスト六発、腕四発、太股八発です」

「足を打ち付けられて打たれたら、三発も殴られれば失神するでしょう。屈強な男でも十発耐えられるかどうか……」と田中がアゴに手を当てながら感心する。

「そうですね。女性の方が痛みに強いと言われていますが、これほど我慢強い子はそういるものではありません。彼女は県下最高で文武両道の高校の生徒であり、その中でもトップクラスの成績を残していますから、それを裏付ける努力と忍耐が備わっていると考えられます」

と、俺が解説した。

「そりゃ、俺たちのようなサディストのために存在するような少女だと言うことだな」と田中はニタニタと笑った。

「さらに、トップの高校だと、あきらめない、逆境に負けない、辛いときほどがんばるような教育がなされています。これらも、我々には好都合ですね。我々を楽しませるためにがんばってもらいましょう」

神田さんが手を叩くと、みんなもつづいた。広い貨物船の船内に拍手の音がこだまする。

泉は両腕で吊された格好で失神していた。

朋子を呼び出すボタンを押した。朋子は別室で待機していてコールされると駆けつける手はずになっている。

朋子がドアを開け、泉の姿を認めると両手で口を多い、細い目を見開いて硬直したように立ち尽くした。

立ったまま気絶している泉の体には無数の打ち跡が残り股間は小便で濡れ、床に敷かれた板には血だまりができていた。昨夜見た美しい妖精のような少女の姿は様変わりしていたと感じたのだろう。

「朋子、ぼさっと突っ立ってないで、手伝いなさい」

と、俺は叫んで、泉を吊っている鎖をゆるめ体を床へと寝かせた。

足の釘を抜いて、止血を消毒をするように命じた。

朋子は震える手で止血剤と消毒液を患部に塗り、包帯を巻こうとした。

「包帯を巻く必要はないよ。すぐに拷問を再会するから」と俺は言った。

口から泡を吹いたのは肺臓の痙攣によるものだ。一撃一撃が体の

表面だけでなく、内蔵にも衝撃を与え続けていたのだろう。乳房への打撃より背中への打撃で泡を吹いたのはそのためだ。泉の呼吸が整うまで約十分間、俺たちは待った。

「強制的に覚醒させるには刺激が必要なのだけど、ちょっと試したい器具があるんだ」

俺は、スタンガンを改造した刺突型覚醒機を手にした。スタンガンの先端が針のように尖っている。

泉の尾骨を指で探り、骨と骨の間をめがけて針を差し込み、トリガーを引いた。

「ギャッ！」

泉は逆エビ型に体を反らせ悲鳴を上げて転げまわった。

「簡単に気絶なんてするから、もっと痛い目に合うんだよ、泉ちゃん」

俺は泉の腹を踏みつけ言い放った。

「よし、再開だ。二十分も休憩してしまったな」

神田さんが言うと、フトッチョが鎖を巻き上げ泉の腕が天井へ引かれていく。

「やだっ！　もう、やめてください。痛いのはいやです」

泣きじゃくる泉を男たちはにやけ顔で見つめている。

容赦なく、両腕は天井から吊られてつま先立ちへ逆戻りだ。

「いやぁぁぁっ！」

泉は必死に抵抗しようとするが、男たちに押さえつけられ、再び足の親指に釘を打ち込まれた。さっきの傷口より少しずらして打ち込んでいる。

「あああああああっ、ひどい……やめて……」

悲鳴も一段落ついたようなので、震える泉を見ながら、神田さんが言う。

「君は、小便を漏らしたね。悪い子だから、オシッコを入れてあげよう」

神田さんはそういうと、勃起したままのペニスで器用に尿瓶に小

便をはじいた。俺は泉の割れ目を指で開き、朋子にカテーテルを差し込むように言った。

神田さんは尿を五百ミリリットルの浣腸器（家畜用）に注ぎ、尿瓶をフトッチョに渡した。俺は浣腸器にカテーテルを装着して、シリンダーを押す。

「やめてっ、き、きたない！」

泉は反射的に腰を引こうとするが、足の親指に釘が食い込むだけだ。

尿をすべて注ぎ込むと、「おかわりだ」と神田さんがフトッチョが出した尿をさらに浣腸器に注いだ。

「いやあああああっ」

泉の悲鳴に構わず二人分の尿が膀胱に満たされる。

「泉ちゃん、今度、お漏らししたら、もっと痛い目に会うよ」

泉は額から玉のような汗を滴らせて震えている。体重四十キロそこそこの少女の膀胱に大の男二人分の尿が注ぎ込まれたのだ。漏らすなと言う方が無理だ。

「あ、あああ、あああぁぁぁぁぁぁっ」

泉の股間から、尿がほとばしった。

さっきは避けなかった男たちが一斉に退いた。

「なんで、お前ら、逃げるんだよ」

「男の尿を浴びるのはいやだーつての」

泣きながら小便をほとばしらせる泉を見ながら「美少女の立ちションも絵になるな」と神田さんが感心したように笑った。

第8話　地獄への入り口

「さて、オシッコをすぐに漏らしてしまう悪い膀胱には御仕置が必要だな」と神田さんが俺に向かって言った。

「そうですね。男のオシッコが嫌いなようですから、他のものを入れてあげましょう」

俺は、酸にするかアルカリにするか迷ったが、酸性液を注入してやろうと決めた。膀胱を内部から化学的に焼いてやることになる。内臓は物理的な痛みには鈍感であるが、化学的な痛みには敏感なのだ。硫酸を適当に薄めてガラス製浣腸器に注いだ。

「五百ミリリットルで許してやろう。漏らしたら、もっと濃いヤツを注入してやるからな」

泉は汗だくの顔でぎこちなくうなずいた。嫌なのだがうなずかざるを得ないのだろう。

ピストンを押すと、泉の唇から「ヒッ」と声が漏れた。さらに押し込む。

「や、いやあああああああっ！　お腹がっ」

経験したことがない内部から焼かれる痛さを表現する単語などすぐには出てこない。足をジタバタさせようとしても釘で打ち付けられているので、爪が剥がれるだけだ。尿道用カテーテルは細いのでゆっくりとアシドが注入されていく。俺は泉の苦痛にあえぐ痙攣を楽しんだ。五百ミリリットルと言えば尿意をもよおしトイレへ駆け込むくらいの量だろう。膀胱は膨れ上がり内部から焼かれているはずだった。

シリンダー内の薬液がすべてなくなると俺は言った。

「カテーテルを抜くから漏らすなよ。漏らすと尿道も焼かれて、お前の大切なおまんこも焼けるぞ」と脅した。

カテーテルをゆっくりと引き抜くと、泉は歯を食いしばって耐え

ている。
「かわいそうに、栓をしてあげよう」
俺は、ねじ釘を尿道に差し込んでプラスドライバーでそのままねじ込んだ。
「きゃあああぁぁっ！　な、なにを！」
尿道にねじ溝が切られる痛みに襲われて、悲鳴を上げる泉。
特殊金属製のねじ釘は体温で暖まるとわずかに体積を増す仕組みだ。一滴ももらさない栓となる。
「我慢させるのもかわいそうなので、栓をしてやった。これで漏らさずに済むぞ」
「あ、あああぁっ、あああ……」
身動きもままならない格好で、下腹部を内部から焼かれ泉は言葉にならない悲鳴を漏らす。
「ほんとうに泉ちゃんの悲鳴はかわいいな。小鳥のさえずりのようだ」と田中が感心したように言った。その通りだ、昔の文学ならカナリアのような歌声などと表現していたかもしれないと思った。
「さて、悪い下半身の処置も済んだようだし、拷問を再会するか」
と神田さんが言った。
田中とパンチが竹刀を手に取り泉の傍らに立つ。
腫れて一回り大きくなった乳房に一撃が加えられた。
「ぎゃあああああっ！」
そして、もう一撃。
失神から覚醒されたばかりで、膀胱に酸を注入され、さらに女の急所を打たれるのだから獣のような悲鳴も上がる。獣と言っても、泉の場合は、トイプードルとかウサギさんとかを連想させる。
その悲鳴も打たれるたびに「ふぎぃっ」「びぎゃぁ！」とだんだん、人間の言葉から離れていく。
やがて虚ろな表情をしたかと思うと白目を向き失神してしまった。
「何発だ？」
「田中さんが十八発、パンチが十七発です」

「なんだ、それっぽっちか」
一回目は十発以上耐えるとはすごいと絶賛していた神田さんだが、二回目ともなると三十発ちょっとで不満があるようだ。
「失神できないように薬を打ちましょう。心臓が止まるかもしれませんが、ＡＥＤもありますから蘇生も可能です」と俺は言った。
「ああ、例の薬か。それは楽しみだ」と神田さんは期待しているように笑った。
俺が使おうとしている薬のは、脳内モルヒネ状物質と拮抗して、そこ効果を無効にするものだった。人間は苦痛を感じつづけるとエンドルフィンという脳内麻薬を分泌し、苦痛を麻痺させ多幸感を感じられるよう仕組みを持っている。限界を超えたマラソン選手がランナーズハイという快感を感じることや、マゾヒストが苦痛の中に絶頂を迎えることなどはこの物質が働いているからだ。拷問を受ける者が意識が朦朧として、恍惚とした表情になるのそのためである。
エンドルフィンの効果を消すには、オピオイド受容体に拮抗する薬を投与するとよい。いつまでも痛みに慣れることはなくなり、興奮状態になるため失神も生じにくくなる。
オピオイド拮抗薬にはナロキソンやナロトレキソンなどが知られているが、それらを混用し副作用である肺浮腫などを抑える薬を混合した拷問薬が開発されている。軍諜報部の秘密部隊など限られた部署で密かに使われている。当然、マゾ的な快感が得られなくなるためＳＭプレイには適さない。
俺は朋子に命じ、オピオイド拮抗拷問薬を注射器で腕の静脈に注入させた。
「意識は取り戻させなくていいのか？」と神田さん。
「意識なんてすぐに戻ります」
泉は、大きくビクン、ビクンと体を痙攣させると、「ふぎいぃぃっ」と奇妙な悲鳴を上げ目を見開き震えはじめた。
「はうっ、はうぅぅつ」
身動きが取れない体で、必死に苦痛から逃れようと体を震わせて

いる。
「元気がよくなったじゃないか」と神田さんは笑った。
「体中の痛みと言う痛みがダイレクトに感じられているはずです。拷問を始めたときより、ずっと痛いでしょうね」
自然の中では感じられるはずのない痛みに表情が用意されているはずもなく、泉は大きな瞳をクリクリと動かしながら、口からよだれを流して悲鳴を上げたりうめき声を上げたりするしかなかった。
「いいな。この薬はいい。覚醒剤なんて問題にならない」と神田さんは大喜びだ。
「欠点は、効果が四十分程度しか持たないくらいです。頻繁に投与しないといけません」
「普通の拷問なら、四十分もかからずなんでもしゃべるだろうしな」と田中。
「どこまで耐えられるかな」
耐える耐えないの問題ではない。
逃れることができない激痛に絶え間なく襲われ、悶えることも許されない泉の体にさらなる拷問が加えられるのだ。

第9話　空中バレエ

両手首を鎖で天井から吊るされた泉はつま先立ちの姿勢であり、両足の親指が釘で床に敷いた板に打ち付けられていた。その鎖をさらに巻き上げるよう神田さんが指示をだした。ネズミとフトッチョがハンドルと回し泉の体を引き上げていく。

足が釘付けされているので腕が引っ張られと釘が爪に深々と食い込んでいく。

「あああああっ！　うぎいぃぃっ！　うぐぐふぅ……」

身動きできない泉は体を小刻みに震わせうめくだけだ。

釘は爪を割り、肉に食い込んだ。

「ふぎいいいっ！　い、いいいっ！」

「よく見ると失神と覚醒を小刻みに繰り返しているように見えるな。激痛で失神し、激痛で覚醒しているわけだ」

泉は、肺臓の痙攣により口から泡を吹きながら、呼吸もままならないはずだ。普通なら、失神すれば痙攣は止まり呼吸が戻るのだが、それすら許されないのだ。

痙攣する肺を無理に使おうとするから、時折、ふーっ！　ふーっ！　を泡を飛ばし息を吐く。俺は、空中に射精した。

ペニスに触れることなく射精する快感は、完璧な美少女と究極の苦痛があって初めて体感できると思った。

田中とパンチが泉の体に竹刀を叩きこみながら射精する。

泉のつま先が宙に浮き、釘が爪の肉に深く食い込み、親指の骨がきしむ音が響いた。

神田さんのペニスの先からも精液がほとばしっていた。

「あ、ふーっ！　あああああ、ふぅぅぅ、ぎ、ぎげぇつ」

本来なら何回も失神して拷問を中断されているはずであるが、泉にはそれがない。限界を疾うに超え、体力の消耗も激しいだろうが、

今、拷問を始めたばかりのような元気の良さで震え悲鳴を上げている。そうせざるを得ないのが、最先端医学の恩恵なのだ。

泉の親指の下と床に敷かれた板の間に釘がのぞく。つま先が一センチほど宙に浮いた状態だ。

俺は、釘の頭が泉の爪の肉を貫通するのを今か今かと待っている。

「ちょっと、待ってください」とネズミが銀縁の眼鏡を指で上げながら言った。

「このまま、釘が親指の肉を引きちぎって、泉ちゃんの体が宙に浮いたりしたら、ほとんどの人がまた射精しちゃうでしょう。でも僕は射精できない」と言った。

「どういうことだ?」

「ちょっと、試したい拷問具があるのです。僕は電気責めが好きなんですよ。きっと、満足していただけると思います」とネズミは頭を下げる。

「工学博士のネズミが言うのだから、期待できますね」と田中。

「いいだろう」と神田さんがうなずいた。

鎖の巻き上げが止められたが、泉の苦痛はいささかも減ることはない。

そんなことはお構いなしに、ネズミが電極を床に刺さった釘に取りつける。足の指と床の間の空間だった。両足に青い電極をセットし、赤い電極を尿道に突き刺さっているねじ釘に噛ませた。

「尿道から両足先端へ電流を流します。直流のパルス波で小刻みに流しますから、かなりの苦痛を与えられるはずです」

ネズミは早口で興奮気味にしゃべると、電線がつながっているボックスのダイヤルを回した。

「ふぎぃぃぃっ!」

しなやかなスラリと伸びた足をガクガクと痙攣させて呻く泉。

続いて興奮したネズミが捲し立てた。

「バレエで小鹿のように立ち、飛び跳ねていたほっそい足首からふくらはぎ、グラウンドで俊足を発揮する引き締まった太もも! そ

んな彼女の足を見て、ひそかに勃起する男たち。それが電流で痙攣を起こし震えているっ！　もっと、電圧を上げるよ！」

ネズミはさらにダイヤルをひねる。

「うぎぃぃぃぃっ！」

泉の下半身の痙攣が激しさを増した。痙攣の幅が大きくなったということは、足の爪の肉に釘の頭がそれだけ食い込んでいることを示していた。

泉の秘部の割れ目から一筋の湯気が登る。尿道から膀胱へ流れた電流は、内部の酸性液の水素イオンを活性化させ、粘膜から酸素を奪いさらに火傷の深度を増すだろう。わずかずつ温度と体積が上がっていくの液体に破裂しそうに膨らんだ膀胱も悲鳴を上げているはずだ。

本能的に足を釘から外そうともがけばもがくほど釘の頭は指にめり込んでいく。右足の親指は脱臼したようで、時折、おかしな方向へ屈折する。

「ひ、ぎゃぁぁぁあぁぁあああぁっ！」

左足の釘頭が肉を貫通したようで指の腹の皮が伸びたと思うと、すぐに破れた。自由になった左足を振り上げながら、必死で苦痛から逃れようともがく泉。

残った右脚に電流は集中することになり、痙攣が小刻みになる。脱臼した親指の関節がねじれ、体が半回転する。

「あ、あああああっ……あああああっ！」

自由な左脚は、時折振り上げられたり、右脚をなんとかしようと蹴ったりする動作がまるで奇妙なダンスのようだ。

「これは、空中バレエだな」と神田さんが興奮した荒い声で叫んだ。

「電圧を最大にしますよっ！」

ネズミが唾を飛ばしながらダイヤルと回す。

「ひぎゃあああぁぁあぁっ、ああああっ、ひぎぃぃぃぃぃぃっ！」

泉の腰がガクガク震えたと思うと、右足も釘から外れ宙に浮いた。

電撃から解放された泉は、しばらく痙攣が収まらずに両足をばたつかせて宙に浮いている。

「ふうううぅ……」

ネズミが精液にまみれたボックスを抱いてため息をついた。

第１０話　小休止

「少し休憩しましょうか？」
俺は神田さんに言った。
神田さんの額には汗が玉になって流れていた。
貨物船の倉庫を改造したただっ広い拷問部屋の空調は快適なはずだが、異常な興奮で皆、汗でずぶ濡れだった。
「そうだな、全員、一度は射精したから、少し休憩しよう」と神田さんはうなずいた。
「オレ、二回も出しちゃったよ」とフトッチョ。
「見ているだけで、全員に射精させるって、泉ちゃんはすごいなあ」と田中が言った。
まだ、拷問をはじめてから一時間も経っていない。
泉は、電撃から解放されたとは言え、膀胱は焼かれ続け、足の親指は脱臼し釘の頭が貫通した大穴があいていた。小手高に吊され、体には百五十発近くの竹刀がたたき込まれたダメージにうめきながら時折身悶えている。
朋子に足の止血と脱臼の処置を命じた。
朋子は止血をすませたが、脱臼の処置はしたことがないと言う。
かまわないから、やるように言った。
「きゃあああっ！　い、いたあああぁっ」
ねじれた親指をなんとかつなごうと朋子は懸命だが、うまく行かず、そのたびに、泉は激痛をうけることになる。
朋子が蹴られて転倒すると、俺はそれを見て笑いながら言った。
「フトッチョ、手伝ってやれよ」
「え？　俺、休憩中」
「泉ちゃんの足に触り放題だ。二発出したの、お前だけだし……」
フトッチョは一物をしごきながら泉の足元にしゃがんで、足首を

つかんだ。
朋子が、親指の関節を元に戻そうとすると、泉は激痛に悲鳴を上げた。
「ほら、朋子、君は治療をするのが仕事だ。拷問しちゃだめじゃないか」
「泉ちゃん、下手な看護婦さんを恨みなさいね」
「かわいそうに、早くつないであげないと痛がるだけだよ」
朋子があせればあせるほど、うまく行くはずがない。丁寧にやろうとすると力が足りずに返って失敗し、思い切りやろうとしても経験が足りずはずしてしまう。
「ごめんなさい」「ごめんなさい」と繰り返しながら、朋子も汗を流しながら懸命に同じ失敗を繰り返した。
そのうち、ゴキッと音がして、なんとかつながったようだ。
「十八回目でしたね」とネズミが言った。
オピオイド拮抗薬が切れてきたのだろう。休憩時間中に注射するように朋子に命じ、その間に俺たちは次の拷問の話で盛り上がった。
太ったコックが料理を運んできた。ステーキを一口サイズにカットされたものが皿に大盛にされている。それをレタスとパプリカ、トマトのサラダが囲んでいた。
「これから、たくさん射精することになるだろうから、しっかり精をつけないとな」
神田さんが言うと手づかみで肉を口に運んだ。俺たちもそれに習い、大皿に群がり貪り食う。ペニスはまだ勃起状態を持続していたが、さらに硬くなるように感じた。
「うわあぁぁぁあぁぁっ」
泉の悲鳴が高くなった。
追加されたオピオイド拮抗薬が効いてきたのだろう。
苦しそうに眉をひそめ、目から涙を流し続けている。鼻筋が通った美しい顔だ。どれだけの男が空想の中で彼女を犯してきただろう。クラスの男子生徒はほとんど、教師の中にも何人かいたに違いない。

すれ違うサラリーマン、道路工事の作業員、車のドライバー、女子でもいただろうなと思う。その中の何人かは、彼女を痛めつけて拷問する妄想を楽しんだヤツもいるだろうなと思うと笑みがこぼれる。

そんなヤツラが想像していたことを実際に行っている、いや、想像をはるかに超えた苦痛を泉ちゃんに味合わせてやることが出来る。

そんなことを想像しただけでペニスがビクついてきてしまった。

「さて、そろそろ、次の拷問をはじめようか」

と、神田さんが肉片を飲み込んだ。

第11話　サンドバックドール

「今度は俺にやらせてください」
パンチがボクサーグローブを手にはめながら言った。
泉の前に立つとボクサーのように脇を絞め首をガードする構えをとった。二・三発素振りをすると、右、左とジャブを泉のオッパイに見舞った。
「はうっ！　ううっ……！　いやあぁっ」
左、右！　右、左！　ワンツー！
竹刀で散々叩かれてたので泉の乳房は、腫れて一回り大きく張っているので、パンパンと良い音を響かせる。泉のかわいい悲鳴との共鳴が悲壮感をそそる。上を向いた乳首が住処を侵された生き物のように踊っている。
左アッパーから右のストレート。
グラブが左乳房をつぶすようにめり込み、弾力ではじかれるように戻される。
泉の長い脚が空中を舞う。
パンチは空手をやっているがボクシングの経験はないと言っていた。それでも拳の威力は下手なボクサーより強力だろう。
「腹パンはやらないのか？」とパンチに声をかける。
「腹パンもいいけど、こんな良い胸を見れば誰でも殴りたくなるだろう。アバラを折る心配なしに思いっきり打てるのもいいぞ」
と息を弾ませる。
「そろそろ腹パンいくか」
泉の引き締まったウエストのへその上をアッパー気味に撃った。
「うぐあぁっ」
パンチにしては手加減しているようだ。
左下から打ち上げる。

泉の体が少し持ち上がるように浮く。
吐き気を催したようでゲーゲー言うが吐くものがないのでよだれが垂れるたけだ。
みぞおちの下あたりを叩き上げる。今度は息がつまったようにせき込みながら目を白黒させる。ボクサーならボディをくらい一時的な呼吸困難となりダウンしているところだろう。
へその下にストレートを入れる。
「ふぎゃあぁぁあぁっ！」
泉は足を振り上げて暴れた。
それを見たパンチがさらに下を殴る。
泉は長い脚をでたらめに振り上げて悶える。
膀胱を撃っているのだ。泉の膀胱には五百ミリリットルの強酸が注入されて一時間が経とうとしている。尿が流れ込みさらに容量が増しているであろう。そこを撃たれているのだ。満タンの膀胱が打撃で圧迫され、内で酸がかき回されるのだ。
パンチは、泉の足をフットワークで交わしながら、下腹部を狙い拳を繰り出した。
ボクシンググローブが下腹部にめり込むと、泉の甲高い悲鳴が響く。
膀胱が圧縮されれば、尿道に刺さったねじ釘が押し出されようとして、粘膜もやすられるだろう。また、膀胱が破裂する事態になれば死も考えられる。そんなことになれば腹腔内に強酸がぶちまけられ、その後ろにある膣や子宮、小腸・大腸などが腹腔内から焼かれることになる。麻酔をかけずに開腹手術をしたことこで助かる見込みは低い。そのまま、生体解剖の処刑に写した方が面白いかもしれない。
などと考えているうちに、パンチは泉のウエストより上に三連打を叩きこんだ。泉は再び呼吸が困難となり、懸命に息を吸おうともがく。腹の中には副交感神経が内臓をコントロールする張り巡らされているので、打撃を受けると呼吸困難になることが多い。泉の細

いウエストでは、一度に何本もの神経がダメージを受けてしまうだろう。

「プロのボクサーでも、もう三回はダウンしているな」神田さんの口角から白い歯が見えた。

パンチのターゲットは、再び乳房に移った。

小気味良い音が響く。空手の有段者でもあるパンチの正拳突きをまともにくらえば肋骨の四五本は軽く折れるだろう。ボクシンググローブと腫れたEカップの乳房がクッションとなっているのだ。

「まさに人間サンドバックだな」と田中が言った。

「人間サンドバックとは無粋だな。泉ちゃんはサンドバックドールだ」

「サンドバックドールか。そういう商品を売り出したら需要があるかもな。ラブドールならぬサンドバックドール。女性の形をしたサンドバックで殴られると声がでるとか……」と経済学部の田中らしい。

そんなドールがあったら面白いだろうが、中身が砂では味気ない。中身が肉や内臓、骨などでないと……生身の人間を殴る快感には程遠いなと思った。

「くはぁっ……ゲボッゲボッ」

泉が胃液が混じった黄色みがかった泡を吹きだした。

四回目のダウンか……しかし、カウントが取られることはなく、すぐに次の打撃が見舞われる。これはボクシングの試合ではなく拷問なのだ。

パンチは泉の下腹部にジャブの四連打を浴びせたあと右のストレートを放ちながら射精した。荒い息をしてグローブの裾で汗をぬぐう。

「ふううう……さすがに疲れた」

泉は「げふっ、げふっ」と泡を吹きながら、酸素を求め喘いでいるようだ。肺の痙攣は失神すれば収まるのだが、失神できない泉は痙攣した肺で息をしなければならないのだ。そんな状態でも呼吸が

出来るとは医学的な発見だと思った。普通では体験できない辛さだ。
泉の目から流れ落ちる涙も枯れてきたようで、朋子に目薬を差してやるように言いつけた。
「この娘に水分をとらせる必要があるんじゃないか?」と神田さん。
俺がうなずくと、神田さんニヤリと笑った。

第１２話　水分補給

小手高に吊るされた泉ちゃんの足を田中とフトッチョに抑えてもらい、俺はプラスドライバーで尿道に刺さったままのねじ釘をひねった。

「ひゃあぁぁぁあっ」

柔らかい尿道をねじ切られて泉は震えている。

「いいか、泉ちゃん、尿道が開いたからと言って、はじくと、大事なオマンコが火傷するぞ。一瞬で良いから我慢しな」

そう言いながら、朋子に手渡されたカテーテルを差し込む準備をした。

ねじ釘の先が尿道から抜ける。赤い粘液が滴った。

それと同時に、素早くカテーテルを差し込む。

カテーテルから、赤い尿が排出されてくる。

一時間もの間、膀胱内部を焼き続けた強酸性液が排出されているのだ。

「膀胱内部の粘膜からの出血がひどいですね」

「止血をするか？」と神田さん。

「また、膀胱を満タン状態にすれば、抑えられるでしょう」

「何を入れる？」

「今度は、強アルカリの石灰水なんてどうでしょう。タンパク質を分解するので、酸で焼かれるのとは違った痛みを味合わせることができます」

「クックック……それは面白い。一リットルくらい入れてやれ」

五百ミリリットルのガラス浣腸器に白い液体を入れカテーテルにつなごうとすると、泉は腿を閉じ足を蹴り上げ邪魔をしようとした。

「や、やめてっ、こ、これ以上、痛いことしないでっ！」

泣き声で哀願する。

「日本語をしゃべれるんだな。きゃーっとかぐえぇっとか吠えるだけかと思ってたよ」
サディストたちから、笑いが起こる。
フトッチョと田中が、泉の足を押さえつけた。
俺は浣腸器の先をカテーテルに接続して、ピストンを押し込んだ。
「いやぁあああぁあああああぁっ！　あああ、あつっつついっ！」
昔、石灰水を浣腸された少女が、腹の中に熱湯が染みわたってくるような熱さだったと証言したという記録を思い出した。そのときは五十ミリリットルも入っていないだろうが、今回は、とりあえず五百ミリリットルを注入してやる。
「あああああっ！　や、や、や、やめてっ！　きゃあああぁぁあああぁ……」
産毛が黒くなりかけただけの処女の割れ目に石灰水が吸い込まれていく。
浣腸器が空になったので、満タンの浣腸器に取り替えた。今の時点で体重四十キロ程の度泉の体格では、尿意を感じトイレへ行きたくなるくらいは十分に入っているはずだった。これ以上の注入は、トイレに駆け込まなければならないくらいの量になるはずだ。
ピストンを押し込む手に徐々に高まる圧力を楽しみながら泉の顔を見上げた。目から流れる涙も枯れて、乾いた涙の跡が頬を伝っていた。
「はうぅぅ……」
田中とフトッチョが足を押さえている手の力をほどよく加減しているものだから、苦しみに悶える泉の腰がエロチックにくねる。
「処女の泉ちゃんにしては、変態のような腰の振り方だな」
と、みんなで笑いながら、その様を鑑賞している。
ピストンの圧力が高まり、俺は、危険だと判断して神田さんに伝えた。
「あと、五十入れてやれ。それで栓をすればいい」
メモリ三百ミリリットルから三百五十ミリリットルまで、一気に

押し込んだ。
「ひゃあああああぁぁっ！」
と、泉は膀胱が限界を超えて膨らまされ悲鳴を上げる。
すばやくカテーテルを抜き、ねじ釘をねじ込み栓をした。
「ひあああああぁ……あああああぁあっ」
田中が泉の下腹部に拳を見舞った。
「ふえぇぇっ」
泉は白目を剥き仰け反ったが、すぐに黒目がもどる。普通ならここで失神だろう。
田中とフトッチョが手を離すと、泉は吊されたまま、自由になった足をばたつかせて身悶える。
「小便をしたいヤツいるか？」
神田さんが言うと、ネズミが手をあげた。
「これで、泉ちゃんに飲ませてやれ」
ガラス制の薬缶のような形をした尿瓶を手渡す。
「逆さまにすれば、勃起したまま小便をためられる」
薬缶で言えばお湯の出口にペニスを差し入れ小便をするとうまい具合にためることが出来た。
泉は床におろされ、のたうち回っていた。膀胱の激痛で足が自由に動かず立つこともままならないらしい。
田中が泉の髪の毛をつかみ顔を上げさせ「水分だ。飲め」と言った。
ネズミが尿瓶の口を泉の唇に押しつける。
泉は唇を堅く閉じ、首を横に振って抵抗した。
「口を開けないと、歯を全部へし折るぞ！」
と田中が一喝すると、桜色の唇を開き、尿瓶をくわえ込んだ。
乙女の小さな喉が鳴り、小便が胃に流れ込んでいく。
突然、泉はせき込み、小便を吐き出した。一度にたくさん流し込みすぎて、気管に入ったのだろう。
「バカ女！　全部飲めと言ったろう」

田中は容赦なく泉の髪をつかみ頭を持ち上げ、そこにネズミが尿瓶の口をつっこむ。
泉は、せき込みながら、小便を飲み干した。
「お、俺のザーメンも飲ませてあげたいな」とフトッチョが神田さんの顔を見ながら言った。
神田さんがうなずくと、勃起したペニスと泉の口にくわえさせた。
小さな口には、やや大きいようで泉の顔が苦痛にゆがむ。
「しょ、処女フェラだーっ」
フトッチョは泉の頭を両手でつかみ腰を降り始めた。
「ふぉ、ふごっ、ふごうぅ」
口をいっぱいに広げられた泉は息も満足に出来ないようだ。
フトッチョが身体をブルブル振るわせて硬直させた。
「い、いっぱいでたーっ、三発目だけど……一番、いっぱいでたーっ」
ゆっくりと泉の口からペニスを引き抜くと白い精液がしたたり落ちた。
泉はむせかえり、精液を吐き出した。
キスもしたことがないだろう十五歳の清純な女子高生がいきなり小便を飲まされたうえにフェラを強要されたのだ。それでも正気を保っているのは、県下一の進学校に通い文武両道の教育を受けている才女だからなのだろう。
「俺のもくわえろよ」
パンチが泉の口にペニスを突っ込んだ。
「歯を立てたらぶっ殺すぞ！」
パンチの怒鳴り声が響く。
泉の口の間から黄色みがかった液体がほとばしった。泉は目を見開き、息をしようともがいているように見えた。鼻の穴からも小便が流れ出ている。
泉はむせながらも歯を立てないように懸命に息をしていた。
「どうだ、俺の小便の味は。このまま、ザーメンも飲ませてやるか

らしっかり飲めよ」
パンチは泉の頭を抱えてイマラチオを始めた。

第１３話　肛虐輪姦

パンチがペニスを引き抜くと、泉はむせかえり口から精液をしたたり落とした。

かなり吐いてはいるが、胃にもかなりの量の小便と精液が届いただろう。

俺は泉を四つん這いにさせて、肛門を観察した。桜色の菊座がヒクヒクと呼吸にあわせ動いているが、しっかりと閉じられていて、何者の侵入も拒んでいるように見える。このアナルをこじ開けてやりたいと思った。性器の純潔を保ちつつ、ほかの穴を汚されるのも、最高級の美少女には似合っている。

俺は中指に舌をはわせ唾液を塗ると泉の菊座に突き立てた。ちょっとしたコツがあるのだが、指は難無く直腸へ進入した。

「ひゃっ！」

肛門の中へ指を入れられるなど予想をしていなかったのだろう。泉は声をあげ逃げようと腰を沈めるが、フトッチョに押さえつけられる。

指を回して肛門を広げていく。力が弱まった瞬間をねらい、指を引き抜くとペニスを突き入れた。

「あ、ぐぐぐぐっ！」

よく、はじめてアナルセックスをした女性が息がつまって呼吸ができなくなったと言うことを聞く。大便より太いペニスが入るので痛みもあろうし、口も肛門も同じような神経が通っているようで、肛門をふさがれると口をふさがれるような反応をするようだ。

鬼頭部に腸管のねっとりとした熱い粘膜の感触が伝わり、肛門括約筋がペニスを締め上げてきた。俺は、ペニスが今まで以上に硬化していくのを感じた。

一流の女は、男から精液を搾り取るために、身体の隅々までよく

できているのだろう。泉の直腸や肛門も体験したことがないくらいペニスになじみ快感を増幅させてくる。腸粘膜が熱い吐息を吹きかけられたごとく、やさしく鬼頭を包みほぐし撫でる。肛門は、ペニスの付け根を絶対に逃がさないという意志があるかのごとく締め上げてきた。

負けじと腰をふり、締まった尻に恥部を叩きつけるように腰を振った。質のよい筋肉の上にやわらかな脂肪が乗った尻は小気味よくパンパンと音を倉庫内に響かせた。

俺は急速にのぼりつめ、射精を遅らせようとあがなう気力が奪われていくのを感じた。直腸内に精液をいつもの倍量を噴出させたように感じ、さらに連続して発射の痙攣が襲った。

それでも、興奮は収まるどころか高まる一方だった。

「すごいよ。泉ちゃん、ご褒美にオシッコ浣腸のプレゼントだ」

俺は、そのまま、泉の腹の中へ放尿した。

「ひぃっ、ふ、ふぇえぇえぇえぇっ」

まじめな女子高生にとってアナル性交など想像もできなかったことだろう。ましてや、腹の中に小便をされることなど。

ペニスを引き抜くと、泉の肛門から小便が吹き出した。

「どうだった？　泉ちゃんのアナルのお味は」と神田さんに肩をたたかれた。

「最高でした。締まりといい、内部の滑りや体温も良い感じですね。消化気管の内部は対外と繋がっていますから、肌がきめ細かく美しいならだと消化器官内部も綺麗だということでしょう」

「そうすると、膣や子宮も美しいと言うことだな」

「どんな男にとっても最高の生殖パートナーとなる娘でしょう」

泉は、尻から小便を垂らしながら、床の上をのたうち回っていた。

「尿道を塞がれて、尻と口から小便を漏らすとは、ひどい娘だ！」

神田さんは、泉の下腹部を蹴り踏みつけた。

「は、ひぃっ」

「処女のまま、肛門輪姦をしてやる。俺が終わったら、みんな順番

に肛門を犯せ！」

神田さんは、泉の尻を抱え肛門に挿入した。

激しく打ち付けるピストン運動に「ぐえええええっ」と喘ぐ泉。

「さ、最高だ！　今まで犯した尻穴の中で、最高の締め付けだ」

神田さんは目を見開き、恍惚とした表情を浮かべた。

泉は、息をするのも苦そうに、手で床を掻きむしりながら逃れようとするが、乙女の細腕ではどうにもならない。

田中は、骨付きのチキンをかじりながら「次は俺が行く」と　言った。

神田さんの体が硬直し震えた。さすがの神田さんも三分も経たないうちに放出してしまったらしい。見ているだけで空中に射精してしまう美少女に入れたのだから仕方がないと、俺も自然に笑みがこぼれる。

「これはたまらん。泉！　ごほうびをやるから口を開けろ！」

神田さんは泉の両耳をつかみ顔を上げさせる。

「聞こえないのか！　口を開けろ」

泉は小さく口を開けると、神田さんはペニスを押し込みイマラチオをはじめた。泉の口角から小便が漏れてきた。

泉が、せき込むと鼻の穴からも黄色の液体が滴り落ちる。

神田さんがペニスを抜くとむせ返る泉の肛門に躊躇なく田中がペニスを突き立てた。田中も「あっ」と口にすると、射精してしまったようだ。『アッと言う間』の例えの意味を実感できたと言うことだ。

「こんどは、ボクが！」ネズミが泉の後ろへ回る。

「ネズミ、『アナルセックスは不潔だからしない』と言ってたんじゃないのか？」

「それはそうだけど、泉ちゃんは別さ。この子になら、なんだってできるさ。どんな汚いことでも残酷なことでも……僕らに快楽を与える天使だからさ！」

ネズミには工学博士にしてはファンタジックなところもあると思

う。
「ほんとは、ペニスじゃなくて電撃棒を入れたいのだけどね」
と、ネズミは言いながら、ペニスを挿入した。
ネズミが果てるとフトッチョが、
「泉ちゃんといると何発でもでちゃうなぁ。ふ、不思議だなぁ。量もたくさん出るし、不思議だなぁ」と言いながら尻穴を犯す。
パンチも口の中に射精したばかりなのに後につづいた。
「処女のアナルと言うだけで最高なのに、こんなに美人でかわいい子だと腰が抜けてしまいそうだぜ」
と分けの分からないことを言いながら犯した。
精液と小便で水分をたっぷりと注ぎ込まれたためか、泉の頬に涙が伝った。
「見ろよ、泉ちゃんの涙の清らかさ」
泉の髪をつかんで頭を上げさせながら田中が言った。
「泉ちゃんは、小便もザーメンも、清らかに浄化してしまうんだな」
とネズミの言葉に、俺たちは、まぶしそうに目を細め泉の涙を見つめていた。

第１４話　アクリルホース

拷問を初めてから、二時間を過ぎていた。泉は二回失神し、オピオイド拮抗薬により失神を禁じられてから八回は失神状痙攣を起こしていた。

はじめに神田さんが言っていたように『一時間持たないかもしれない』という言葉は本当だった。二時間後の今、泉が生きているだけでも奇跡に思える。

肛虐輪姦によって、開きっぱなしだった肛門に食塩水を浣腸して栓をする。洗浄と消毒の目的もあるが、一種の拷問である。食塩水浣腸は、激しい苦痛を与えることで知られている。高濃度の食塩水により急激に脱水された直腸の粘膜が悲鳴を上げるように痙攣する。傷に塩を塗られると激しく痛むのもこのような仕組みからだ。

一リットルの浣腸は、泉の直腸の容量を超えていた。泉は腹を押さえてうめきのたうつ。

過呼吸の症状を起こし、目を白黒させながら、せき込んだ。普通ならここで失神状態に陥るだろう。

「これで九回目だ」とうれしそうなネズミの声が響いた。

「膀胱の方の石灰水も食塩水に入れ替えた方がいいな。オピオイド拮抗薬も追加しよう」

フトッチョと田中がに泉を押さえつけると、朋子に薬を静脈注射するように命じた。俺は、カテーテルを差し込み膀胱の中の石灰水を排泄させる作業に取りかかる。

血と石灰が混じり合ってピンク色になった液体がビニールパックに溜まっていく。

「石灰水は八百五十ミリリットル入ったから、食塩水は一リットルに挑戦してみよう。尻と膀胱で二リットルだ」

強酸性液で焼かれ、強アルカリで溶かされ、食塩水で脱水される

のだから、美少女の膀胱はたいへんである。八百五十で限界を少し超えたように思えたが容赦はしない。

「うぎゃあああああぁぁっ！」

泉の意識がハッキリしたのか激しく身悶える。

「まだ五百も入っていないぞ」

俺は、一気にピストンを押し込みシリンダーを空にした。

「うぎひぃいいっ！」

五百ミリリットルの浣腸器を差し替え、注入を開始する。八百入ったところで、やはり限界が来たようだ。しかし、力を込めピストンを押し込んだ。

「あっ！　あああぁぁあぁあああっ、こ、こわれるル・るっ」

断末魔のような悲鳴があがるがお構いなしだ。膀胱など壊れても適当に縫って栓でもしておけば用が足りるのだ。

残り百ミリ、九十ミリ、八十ミリ……

「あああぁぁぁあああっ」

七十ミリ……これ以上、押すとカテーテルが抜けそうだ。

泉の下腹部を押すとパンパンに膨らんだ膀胱の形が指先に伝わってきた。俺は、腹パンの衝動に駆られて、膀胱めがけて拳を打ち込んだ。

「うぎゃあああああっ」

悲鳴と同時にカテーテルが抜け、赤い食塩水がほとばしり俺の身体をぬらした。

あわてて、ねじ釘で栓をする。

俺は、ハンカチで食塩小便を拭きながら、「おっと、やってしまった。酸やアルカリじゃなくてよかったよ」と笑った。

「章一くんに小便をぶっかけた罰として、あれに乗ってもらうことにしよう」と神田さんが言った。

あれと指さす方向にあったのは、三角木馬の形をした拷問具だった。形は三角木馬であるが、木ではなく透明なアクリルで作られていた。三角アクリルホースと言えば良いのだろうか。

フトッチョが泉の乳房を握りながら吊り上げ、アクリルホースの上に降ろした。股間がアクリルの頂点（プレイ用ではなく拷問用であるから三十度近い鋭角である）にふれると、泉は全身を小刻みに震わせながら硬直させた。

足首にベルトをつけ、床にしかけた滑車から延びた鎖を引き延ばし固定する。そして、さらに鎖を巻き上げ、足を引っ張ることにより、頂点をオマンコに食い込ませた。

「ひ、ひぎぃぃぃっ」

泉は自由な両手を突っ張って抵抗するが何の効果もない。田中が竹刀で泉のオッパイを打つと、手でかばおうとするが、すぐにアクリルホースに手をかけて身体を持ち上げようとするので、本能的な無意識の抵抗なのだろう。

「この拷問具の面白いところは、下から覗けるところなのだ」

と、神田さんは、アクリルホースの下に仰向けに寝ころび、俺を手招きした。

俺も神田さんと並んで寝ころんだ。

そこから見える光景は、世界絶景ベストテンにランク陰が確実と思われるくらい見事な眺めだった。

三角ホースに割られた股間は、アクリルに吸いつくように広げられている。大陰唇が割られ、赤ん坊のころから変わらぬようなソフトな色合いの小陰唇が張り付いている。ぴったりと閉じられていただろう膣口が鋭い峰にわずかに裂かれている姿は、喉元に剣先を突きつけられ立ち尽くす少女のそのものだった。

クリトリスは、峰のどちらに行こうか迷ったあげく、自らの体重に押しつぶされ、喘いでいるように見える。

「鋭角に裂かれる処女の泉というところですか……絶景です」

「悲鳴や痙攣が加わるともっと良いだろうな」と神田さんは、田中とフトッチョに合図をした。

二人は、泉の手首にベルトを巻き、鎖につないで引き上げる。泉は万歳の姿勢でアクリルの三角ホースに跨った形だ。

田中とフトッチョは、無防備に震えている泉の体に前後から竹刀を振るった。オッパイ好きの田中は泉の乳房に打ち下ろし、さらに打ち上げる。フトッチョは、泉の尻に竹刀を打ち下ろした。

「ひぎゃあぁあああぁっ！」

下から、泉の裂かれた性器を見ていると、打たれるたびにアクリルの峰を滑り頂が食い込んでいく。尻を打たれるとクリトリスが峰の左側に落ちようか右側に落ちようか踊る。ちょうど真ん中に落ちればクリトリスが裂かれてしまうのではないだろうかと想像してしまう。

股の中心部の皮膚がすり切れ血がにじんできた。それはアクリルと内股の皮膚の間を伝い、滴となって神田さんの胸に落ちた。神田さんは指でそれを拭い、舌をだして舐めとった。

「美味、美味」と微笑むと、「もっと、強く打て」とフトッチョに言った。フトッチョは野球のバットのように竹刀を構え振り抜いた。

小気味良い破裂音のような響きがあがる。

「ひぎぃぃぃっ！」

続けざまに何発かたたき込まれる。

「ひぎぃぃっ！」「ひいいぃぃっ！」「ふぎぃぃぃっ」

そのたびにアクリルの頂と体重の狭間でクリトリスがのたうつように踊っていた。

第１５話　ぶつかり合う分銅

すり剥いた股間から血を流しながら、泉は口から泡を吹いて身体を痙攣させた。白目を剥き、顔色が蒼白になり、唇が紫がかった。

どうやら、心臓が痙攣を起こしたらしい。救命には一刻を争う。

泉を床に寝かせて朋子にＡＥＤを用意させた。パットを両手にはめ、泉の胸を見ると、呼吸もほとんど止まった状態だ。それでも意識だけは失いきれていないのか、薄目をあけ、ときどきビクンビクンと身体を大きく痙攣させながらうめき声を上げている。

泉のグレープフルーツを思わせる乳房をみながら、電流が通るだろうかなどど余計な心配をしている自分に苦笑した。

俺はＡＥＤの指示通り、パットを泉の胸に押し当てた。バンッと泉の上半身が跳ね上がり、「ううっ……」と泉がうめき、苦しみ悶え始めた。

心臓が正常に動きだしたらしい。

「生存時間、二時間四十五分……このまま、死んでしまえば苦しまなくてすんだのに」とつぶやいたネズミの顔は笑っていた。

「はうぅぅ、はうぅぅ」

息を吹き返したばかりの泉は、下腹部を押さえながら、口をぱくぱくさせて喘いでいる。

「泉、心臓を止めちゃって死んじゃったらどうするの？　心臓を鍛えてやらないといけないな」と神田さんが言った。

「元陸上部の体力を見せてもらいましょうか」

「短距離と長距離、どっちがいい？」と神田さんが床の上の泉を見下ろして言った。

「早く、答えろ！」

泉の下腹部を踏みつける。

「うぎゃあああぁっ」

泉は鳴き声をあげながら、必死で言葉を絞り出すように答える。
「た、たん、たんきょり……」
「そうか、短距離が良いか。それじゃあ、マラソンをしてもらおう」
ニヤニヤ笑いの神田さんが泉を見下ろしながら言った。
泉は，苦しみに顔をゆがめながらうなずくだけだった。痛みに言葉の意味を理解していないのだろう。
「当然、陸上部なのだからフルマラソンを走ってもらおう。幸いただっ広い倉庫の中だから、一周百メートるっはあるだろう。その前に用を足しておくと良い」
俺たちは泉を押さえつけ、膀胱と直腸の食塩水を排泄させ、新しい液に入れ替えた。排泄された血で赤くなった食塩水が新しいものに入れ替えられただけ、痛みは新鮮さを取り戻したのだろう。泉の悶え方もいっそう激しくなる。
床に転がり、息をするのがやっとの泉に対して、立ち上がれと言うだけで酷な命令だった。田中が泉の髪をつかみ、強引に引き上げる。
泉は肩で息をしながら、下腹部を押さえ泣きながらよろよろと立ち上がった。
「ただ、走るだけじゃつまらないから、ちょっと細工をしてみましょう」
ネズミは泉を押さえるようにフトッチョに言うと、小陰唇を開きクリトリスに針を刺した。
「ひぃぃぃっ、い、いたああっ」
泉は、腰を引こうとするがパンチが腰を押さえた。
針はクリトリスを貫通し、そのまま突き通された。針にはテグスがつけられていてクリトリスを貫通したテグスを結んだ。結び目が閉じられクリトリスにテグスが食い込む。
「あ、あああああぁぁあああっ」
泉は天を仰ぐように絶叫した。
クリトリスから垂れた二本のテグスを膝より下の高さで切断し、

百グラムの分銅を結びつけた。クリトリスは二つの分銅に引っ張られちぎれそうに痛むはずだ。

「ひいいいいいいっ」

泉の目から大粒の涙がこぼれる。

血がテグスを伝い分銅からしたたり落ちた。

「床が汚れると悪いな」とネズミはクリップでクリトリスを挟んで出血を止めた。

「あ、あ、あっ……」

泉は声も出せないようだ。

「素っ裸で走るのもかわいそうだから、陸上選手用のレーシングウエアを着せてやろう」

神田さんが言うと泉にブルマを投げた。ブルマをはかせて、両の足穴から、分銅が吊されたテグスを垂らす。

上半身は、胸を覆うようなトップスを着せる。ビキニ型のへそ出しタイプなので、泉のEカップの胸はオッパイそのものを包んでいるように見える。

「素っ裸より、返って興奮するな」

と田中が言うと、みんなが笑いながらうなずく。

倉庫内のライトが点灯する。今まで俺たちのいる中央部だけが明るく照らされていたが、高い天井に吊るされたライトが灯ると薄暗いながら部屋の全貌が見える。金属製の壁から鉄骨がむき出し錆が浮いているのが解る。本来ならここにコンテナが詰め込まれていたのだろう。今は、ただっぴろいフットサル場のような雰囲気だ。確かに余裕をもって回っても一周百メートルはありそうだった。

「さて、準備もできたことだし、マラソンをはじめてもらおうか」

神田さんが言うと、パンチが泉の尻をたたき、走れと怒鳴った。

泉が一歩踏み出すと、膝に当たった分銅が、大きく前にはじかれ、互いにぶつかり合い、股下で暴れ回った。クリトリスが無作為の方向へ引っ張られつづける。二つの分銅が不規則にはじかれクリトリスの傷をかき回す。

「は、はうぁうぅっ」
泉の歩行は一歩で止まってしまった。
「走れと言っているだろう」
パンチは泉の尻を蹴った。
勢いで泉は二・三歩進んだ。分銅がぶつかり合う乾いた音が鳴る。
「あ、はぎゃうぅっ！……」
泉は座り込んでしまった。
「マラソンしろって、言ってんだろ！　ふざけているのか、三歩しか走ってないぞ！　走らないと、オッパイを切り取って、顔をめちゃくちゃに切り刻むぞ！」
パンチは、泉の背中を蹴りながら怒鳴りつける。
「は、は、はし、り、ますから……」
泉は泣き声をあげ、立ち上がる。
しかし、一歩、歩いただけで硬直したように立ちすくんでしまう。
「泉ちゃんには、まだ、たりないようだね。あと二つ追加してあげよう」
ネズミは、そういうとテグスを通した針を泉の目の前にかざした。
「い、いやあああぁっ、は、はしりますっ」
「おそいんだよ」
パンチとフトッチョが泉を押さえつけ、ブルマを降ろすと、ネズミがクリトリスに針を通し分銅を二個追加した。
クリトリスから四つの分銅がぶら下がったことになる。
合わせて四百グラムの分銅を下げられただけでも、激痛を越えているはずだ。それが一歩、踏み出しただけで、各個に踊るように暴れクリトリスが苛なまれるのだ。
「マラソンは無理なようだから、まずは百メートルから始めよう」
俺は提案してやった。泉があきらめてしまったら面白くないからだ。
泉は、たどたどしく足を前に出し数歩歩く。
「歩くな！　走れ！」

パンチが泉のブルマを後ろから蹴る。
加速すると泉の悲鳴があがる。
「止まったら、腹を裂いて内蔵を取り出すぞ」
パンチが叫ぶ。
泉は悲鳴を上げながら、走り始めた。
倉庫の半周くらい走ったところで、泉が突然転倒した。心臓が止まったかと思い、駆け寄ると息がある。失神したらしい。
責めに夢中でオピオイド拮抗薬の投与を忘れていたのだ。一時間程度しか効果がないのが不便なところだった。
俺は朋子に、静脈注射を行うように指示した。
朋子も手慣れてきたようで素早くアンプルから注射器に薬品を吸い上げ泉の腕に注射した。薬はすぐに脳までとどき、二・三分で泉は悲鳴を上げ意識を取り戻し苦しみ始める。
「さあ、走れ！」
フトッチョが後ろから泉の乳房をつかみ、泉を立たせた。
ブルマの中には、満タンに食塩水を入れられ膀胱と直腸、分銅でなぶられるクリトリスがある。まさに苦痛が詰まった紺色の袋だ。
それらの苦痛は、泉が走れば走るほど激しくおそってくるのだ。
「あああ、あふぅぅ」
喘いでも喘いでも、苦痛は少しも緩和されることはない。しかし、喘がずにはいられないのだろう。泉は全身の痙攣に耐えながら走り続けている。
泉は倉庫を一周すると膝に手をやり息を切らせた。
「誰が休んで良いと言った」
尻をけ飛ばされた泉はそのままつんのめり床に倒れ込んだ。
「百メートル走れと言ったが、休んで良いとは言っていないぞ。お前は途中で気絶したので百メートル走ったことにはならない。最初からやり直しだ」
神田さんはそう言うと泉の下腹部を思いきり踏みつけた。
「うぎゃあああっ、ぐほっ！」

泉は悲鳴の後に泡を吹いて体を丸め喘いだ。
フトッチョは泉の乳房を鷲掴みにし持ち上げ、強引に立たせた。泉は唇からは白い泡を滴らせ、目線はキョロキョロと定まっていない。
「走らねえと、顔をつぶしてぶっ殺すぞ！」
パンチが尻を蹴ると、泉は悲鳴を上げながら二・三歩進み走り始めた。四つの分銅がぶつかり合う音と、泉の悲鳴が響く。
たぶん、持たないだろうなと俺は思った。

第１６話　死の百メートルマラソン

パンチが竹刀を持って泉を追い立てている。
俺たちは倉庫の中央で、ふらつきながら走る泉の血がにじんだブルマーや、揺れるオッパイを鑑賞していた。「泉ちゃん、がんばりますね。ボクなら、死んじゃうな。その方が楽だし」とネズミがつぶやいた。
「学業もスポーツも芸術も妥協無くがんばる子なんだよ。どんなに苦しくても、希望を捨てずに頑張れる人間はある程度いるからね。彼女の通う高校は、県下一の名門。受験勉強は生徒の自主性に任せているが、有名大学には断トツの進学率を誇っている。文武両道、勉強も部活もそれ以外の活動も、妥協せずに頑張れるんだ」
「彼女は何のために頑張っているの？」
「大方、生きて家に帰るためにとか、そんなところだとう」
と言っている先から、笑みがこぼれてくる。
ほんとうに俺たちを楽しませるのに、お誂え向きの子だ。
竹刀が尻を打つ音に分銅がぶつかり合う音、泉の悲鳴。
倉庫の隅で泉が胸を押さえ倒れた。
予期していた俺はＡＥＤを持って駆けつける。心臓が痙攣をおこしている心室細動の状態だ。泉を仰向けにすると、口からよだれが流れて薄眼が開いている。このままにしておくと、一分以内で死が訪れるだろう。それにしても美しい死に顔だと思った。
だが、こんなところで死なせはしない。ＡＥＤをセットして、電気ショックを送った。
一発で心臓は動き出す。
泉がうめく。
泉にとって、責めに耐えきれず心臓が停止するということは、ほんの数十秒の休息にしか過ぎない。

「おらっ、立てよ！　いつまで寝ているんだ」
パンチが泉の腹を蹴る。
「ちょっと、休ませてやろう。泉ちゃんの死に顔を見たら、イマラさせたくなってしまったんだ」
俺は、泉の頭をつかんで上半身を起こさせ、ペニスを口に突っ込んで喉の奥を突きまくった。
鬼頭が咽喉の奥に当たり、気道をふさぐたびに「オエッ」と嘔吐反射を繰り返す泉の声に、俺の興奮が高まっていく。
「オエッ、オエッ……オエッ！」
俺は股間に泉の顔を思いっきり押しつけて固定すると、喉の奥へ射精した。ほんとうにこの子とすると、いつもの倍、精液がでる感覚がある。
泉は喉を鳴らし、精液を飲み干した。
今までは、精液を反射的にむせかえり吐き出してしまっていたが、飲み込んだ方が苦痛が少ないと学習したのだろう。
「良い子だ。全部、飲めるようになったな」
俺は、泉の乳房をつかんだ。張りがあり弾力が心地よい。そのまま引っ張り上げ、立ち上がらせると、下腹部に膝蹴りを入れた。
「はうっ」
分銅がぶつかり合いクリトリスを苛んでいる。
「ひいぃぃい、もう、ゆ、ゆるて……」
「まだ、言葉をしゃべる余裕があるようですね」
パンチが拳を握りながら泉の前に膝立ちになった。
俺は後ろへ回り泉の腰を抱えた。
パンチが泉の下腹部に正拳突きを入れる。膝立ちの姿勢とは言え空手有段者の正拳突きだ。満タンを越えている膀胱が破裂しない方がおかしいくらいだ。
「ぎゃあああああっ」
泉の悲鳴には、死への恐怖が感じられた。
ブルマから滴がしたたり落ちた。

尿道はねじ釘で栓がされているはずだが、それを通して漏らしたに違いない。膀胱が破裂する変わりに尿道が裂けたのかもしれなかった。
俺は、ブルマを下げ、小陰唇を指で開くと、ねじ釘の頭の先から赤い液体が流れていた。
「尿道の途中が切れているかもしれないな」
俺は、フトッチョに泉の腕をしっかり押さえつけるように言うと、ねじ釘の頭を指で摘み、そのまま引き抜いた。
「きゃあああああぁっ！　きゃあああぁあああああああああああぁっ！　きゃあぁぁぁあぁあああああああっ！」
血の色の小便が止めどなく吹き出してきた。
酸やアルカリ液はカテーテルで出し入れしていたので、尿道を侵しはしなかったが、食塩水は、もろにねじでエグられた尿道粘膜を通り吹き出てくる。泉の血と小便のにおいが漂う。
「でるわ、でるわ。小便小僧みたいだな」
食塩水は傷ついたクリトリスにも容赦なく染み渡り、分銅からも雨水のごとき流れ落ちる。
「今度は、一リットルの食塩水を膀胱に注入してやる」
無理矢理、シリンダーにピストンを押し込み、泉の膀胱の限界を超えさせて注入に成功した。
尿道栓は一回り太いねじ釘に換えてやった。
「くうぅぅぅっ」
泉は目を堅く閉じ、天井を仰いで歯を食いしばって耐えていた。
「さて、走ってもらうぞ」
「ちょっと、待ってくれ。心臓を止めて休もうなんて、悪い子には御仕置が必要だろう」と、田中が言った。
「下半身だけが責められたんじゃ、オッパイさんに失礼だ」と言うと田中は、レーシングシャツの上から泉の乳首をつまむ。薄い生地でノーブラなのだから簡単だった。
針につけたテグスを乳首に通すのだ。乳首のを縛り一本のテグス

にして、紐に取りつけた。両方の乳首に同じ処置をした。
テグスの輪が乳首に通されそれが紐につながっている格好だ。紐をシャツの肩にかかる部分に絡め、背中に持っていき、背中で結んで一本にした。後ろから見ると型からY字型に垂れている紐に、百グラムの分銅を五つ結びつけた。
「あううううっ」
乳首は分銅に引かれ持ち上げられ、テグスが乳首の傷に食い込む。レーシングシャツの乳首のあたりから血がにじんできた。
「あああああ……」
「うむ、良い光景だ。さあ、走れ、続けて百メートル走れたら、休ませてやる」
泉が一歩踏み出すと、膝の高さの分銅がぶつかり合い、背中の分銅も揺れ動く。足の親指は爪が剥がれ五寸釘を貫通させられた大穴が二つずつ開いている。膀胱と直腸には一リットルずつの食塩水が詰められている。痙攣から復帰した心臓も正常に動いているだけで痛みを発しているに違いない。
「はうぅぅっ、ああ、あうっ、ああ、ああうぅっ……」
オペレッタと合唱部で鍛えられたソプラノの悲痛な声が格納庫に響いていた。

第17話　連続性失神状痙攣

泉は格納庫の半周を回りきり、こちらへ向かって走ってきた。乳房で膨らんだシャツの両乳首の辺りには、背中の重りに引き上げられたテグスの輪に切られた傷口からの血がにじみ、それは、乳房の山のほとんどを赤色に染めていた。ブルマもクリトリスから流れる血で股間が染まり、太股に筋となって血が流れている。

それでも、泉は走り続ける。膝元の分銅は、走る泉の膝に当たるたびに暴れ周り、互いにぶつかり合う。背中の分銅も身体が上下するりリズムで乳首を引っ張る。

泉は、優し気な眉をしかめ、食いしばった桜色の唇からときおり喘ぎを漏らしながら、あご先から涙と汗を滴らせ走ってくる。

「がんばれ、泉ちゃん」

俺は声援を送りながら、すれ違いざまに泉の足を引っかけた。

足を動かすだけで必死の泉はなすすべもなく、転倒した。

「きゃあああああっ！　い、い、いたあああぁぁあぁあっ……あああ、あぁあああぁ……」

泉の足は倒れても、走っているかのように二・三歩分空中を蹴ると静止し、ビクン、ビクンと大きく太ももを痙攣させた。限界をとうに超えた激痛の連続に運動神経がついていけないのだろう。わずか三時間程度に失神三回、失神状痙攣九回、心室細動二回を起こし、さらに容赦のない責めをうけているのだから、神経に狂いが生じない方がおかしい。

「寝るな！」

パンチは、泉の尻を竹刀でバシバシ叩き足で踏む。

「起きろって言ってるだろ！」

パンチは泉の乳首から延びるひもを左手でつかみ引き上げた。テグスが乳首に開いた穴を締め上げシャツに血が染みてくる。

「ひゃあぁあああぁっ」
泉は、たまらず上体を起こし膝立ちとなる。パンチはさらにひもを引き上げ、泉を立ち上がらせた。泉は腰が引けているが、千切れそうな乳首をかばうためにパンチに近づいていくしかない。膝に分銅があたり鳴る。
パンチは泉を十分に引きつけてから、右拳で腹パンをくらわせた。反射的に腰を引こうとする泉は乳首の痛みに悲鳴を上げ、同時に分銅がぶつかり合いクリトリスから血が流れる。腹にくらったパンチは食塩水で満タンの膀胱と直腸に衝撃を与えていた。
「あ、あああぁあぁぁああっ」
パンチはさらにひもを引き泉を引きつけ、また腹に拳をくらわせた。
「はうっ！　あ、あああああああっ」
泉は膝を突きかけたが、パンチがひもを引くのでふんばるしかない。
また、腹パン。
「あうっ、だ、だめぇえええぇぇっ」
耐えきれない泉は膝をつき、乳首のあたりのシャツの赤が広がった。
「ふへへっ、パンチ、ちょっと貸して見ろよ」
フトッチョがパンチからひもをとり、天井からぶら下がるフックに引っかけた。ハンドルを回すとフックが引き上げられる。
天井の滑車がら垂れる鎖が鳴る度に、泉の乳首に架けられたテグスが天井の滑車へ向かって吊り上げられていった。
「あああっ、だ、だめっ、や、やめてぇっ！」
自分の身体がどうなるか想像できたのだろう。泉が絶叫した。
そんなことはお構いなしに、ハンドルが回される。
乳首に架けられたテグスは天井へ向かってピンと張り、泉はつま先立ちになった。体重のほとんどが、二つの乳首に通されたテグスにかかっている。このまま、つづければ、泉のつま先が床から離れ、

体重が完全に乳首だけに掛かることになるだろう。
「あああっ、千切れる！　やめてぇぇえええぇえっ」
フトッチョは口元に笑みを浮かべて、ハンドルを回す手を速めた。
「いやあああああっ」
つま先が床を離れ、泉は大きく延びた乳首で天井から吊り下げられた。
足を降れば分銅が鳴り、乳首から流れた血でシャツが真っ赤に染まる。
泉は、激痛で暴れたいが暴れると傷口が広がり、激痛が激痛を生むだけだということが分かったようで、歯を食いしばって耐えている。
その意志とは別に、反射的に手足の筋肉が大きく痙攣して、身体を揺らしてしまうことを止めることはできないようだった。
「あぐぐぐぐっ、ゴボッ、ゲボボボォォッ」
泉は口から泡を吹き、白目を剥くが、また黒目が戻る。失神と覚醒の連鎖が起こっているのだ。
通常の拷問では見られない、自然界では用意されていない表情は、泉の美しく整った顔立ちを歪め、より一層、美しさを増すようだ。
俺は、うっとり魅入ってしまう。
特に大きな黒い瞳が瞼の裏に逃げるように隠れ、それが痙攣しながら、顔を出し、また隠れ、あの世とこの世を交互にキョロキョロと見ている風は、クリクリと楽しそうに表情を豊かに変える美少女のそれとは真逆なかわいらしさがあった。
「これで、十回目の失神状の痙攣！」
ネズミがペニスをしごきながらうなった。
「小刻みに何回も失神と覚醒を繰り返しているように見えるけど、カウントは一回でいいのかな？」と俺に問う。
「ううむ、自然なら確実に失神してしまうところなのだろうが、薬の効果で失神できずに覚醒を繰り返しているなんて状況は、医学の歴史から見ても医学的にも想定されるものではないからな。極めて

特殊な状況だ。一回のカウントでは状況を記録するには不十分だな」
俺は少し思案した。
「このような状況が十秒以上つづいた場合は、連続性失神状痙攣として時間をカウントすることにしよう」
ネズミはうなずくとストップウォッチのボタンを押した。
泉は体を痙攣させながら泡が混じったよだれを垂らす。
「はうっ、ググぼ……ごぼぼっ……グボッ、ブゴッ」
ネズミが射精し、俺も射精してしまった。
見ると、全員が射精している。
「こいつはタマらねえぜ！」
田中が鼻の穴を膨らませながら竹刀で床を打ち、泉の前に立つ。
そのまま、泉の露出したウエストに胴を打ち込んだ。
竹刀が一瞬、泉の細いウエストに巻き付くように見える。
「ぐ、ぎゃあああああっ」
泉の体が大きく揺れ、体重＋反動の力が二つの乳首にだけ集中する。
左の乳首から血を噴き出しかと思うと左のテグスが外れ、右の乳首だけでぶら下がった姿となった。
泉の小さな柔らかい乳首が耐えられるはずもなく縦にさけたのだろう。
田中は容赦なく泉のウエストを叩き四発目で、右の乳首も完全に裂けてしまったようで、泉の体は床に落ちてしまった。
泉は心臓が痙攣したようで、白目をむいたまま床に転がった。
「連続失神痙攣一分三十秒」とネズミが感激したように叫んだ。
朋子がＡＥＤを運ぶ。
「これで、心臓痙攣三回目！」とネズミははしゃいでいた。

第１８話　裂けるクリトリス

泉の服を破くと、血塗れの乳房があふれ出てきた。細身の体つきにやや大きすぎる乳房が弾むように震える。

ＡＥＤのパットを胸に押しつけ電撃を浴びせると、心臓が正常に動きだしたようで泉が身悶えしうめきだした。

「あ、あふっ、あふっ」

心臓が機能した途端、肺臓の痙攣を起こしたらしく泡を吹き悶える。

乳首に手術用の瞬間接着剤を塗り傷口をふさぐと、傷と垂直方向に針を刺しテグスを通した。

テグスを分銅が付いたヒモにつなげ、泉の上半身を起こし背中に垂らす。乳首がまた引っ張り上げられ、泉は小さな悲鳴を上げる。

シャツが破かれているので、白い乳が上に引き上げられ乳首から流れる血がそれを染めていた。

「心臓が止まったくらいで許されると思うなよ」

泉を立ち上がらせる。クリトリスから吊された分銅が鳴った。

「お豆ちゃんも、乳首みたいに二つに裂いてみたいですね」と田中。

「だったら、分銅を追加してやればいい」と神田さんが言った。

早速、大きな分銅がクリトリスから伸びたテグスに付けられた。

五百グラムのものが左右に一個ずつ、合計で一キロと四百グラムの分銅が吊り下げられたことになる。

オナニーも知らない十五歳の小さなクリトリスを千切るには十分な重さに思えた。

「はあああああ、あえあああえあああ」

泉の股間から流れる血が増し、太股を伝い足下をぬらした。

泉は胸を押さえ激しく息をしている。心臓が痛むのか肺が痛むのか……軽い心室細動くらいなら、意識を保つことができるようになな

ったのかもしれない。泉の食いしばった口角からは白い泡が漏れ、ときおりせき込むように「ふぅっふううっ」と息を漏らしていた。

「さあ、走れよ」

容赦なくパンチの竹刀が泉の尻を打つ。

泉が一歩前進すると、五百グラムの重りがゴチン、ゴチン、とぶつかり合い、さらにひざを打つ。このくらいのニッケルと鉄の重りになると、ひざの方にもダメージがあるだろう。そして、テグスが鈍い刃物のように少しずつクリトリスを内側から削るようにゆっくりゆっくりと切り裂いていく。

「きゃあああぁぁあぁあっ、あああ、あぁぁぁあああぁぁあっ」

陰部神経終末が密に集まっているクリトリスは、ほどよくこすれば大きな快感をもたらすが、痛めつけられれば激痛が走る。男がペニスに同じことをされれば、即、失神だろう。失神並みの快感ではなく、失神並みの激痛に波のように襲われていることが悲鳴を上げるたびに伝わってきた。

「走れ！　走れ！　走らねえと顔をズタズタに切り裂くぞ！」

パンチは激しく泉の尻を叩き、一歩、また一歩と前進させる。

「ぎゃあ、あふぅっ！　ううう……」

泉は心臓のあたりを抑えながらよろめき走る。顔を傷つけられるのは年頃の乙女にとって死より辛いことなのだろう。

「あああああっ！　きゃあああああああっ！　あああああぁぁあぁあ」

股下の分銅が片方だけ下がったと思ったら、もう片方は上がって行った。

クリトリスが縦に切断されテグスの輪が外れたのだ。

ブルマが下がり股間からおびただしい血が噴き出している。

フトッチョとパンチがすぐに泉を押さえつけM字に開脚させた。

マンコを開くと見事にクリトリスが裂けて血が噴き出していた。

血を洗い流してもすぐに湧き出てくる。素早く瞬間接着剤を塗布し、クリップで挟んで血を止めた。出血でいたずらに生命力を奪っては楽しみが続かなくなるからだ。

「また、やっちまったよ」とフトッチョ。
何のことかと思ったら、泉の腕をつかんだ拍子にそれだけで射精してしまったらしい。
そういう俺も、射精していることに気が付いた。ほんとうに泉ちゃんは、男を射精させる天使のような子だと抱きしめたくなった。
「この血まみれのクリに電流を通したい」
と、ネズミが叫んだ。
「じゃあ、乳首で吊るして、クリと尿道と肛門に一度に電流を通してみよう」と神田さんが言った。
「死ぬんじゃないの？」と田中が不安そうな声で言った。
「死んだら死んだで、処女を死姦・輪姦できるのだから良いじゃないか」と神田さん。
「それでも生きていてくれた方がいいな」と田中。
「だいじょうぶ、死なせはしないよ。例え心臓が止まってもね」と俺は言ってやった。もちろん百パーセントの自信はないが、死ぬか生きるかギリギリのところ、どちらかと言えば死なないのが不思議なくらいの苦痛をできるだけ味合わせたかったし、そうするには死を恐れてはならないことも解っていた。神田さんが言うように死んだら死姦でエンドくらいの覚悟がないと、こんなイベントをする意味がない。
「その前に、途中で失神されるのもつまらないから、オピオイド拮抗薬を投与しておこうと思います。そろそろ効果が薄れてくるでしょうから」と、俺は朋子に注射をするように命じた。
その時、泉が叫んだ。
「ち、注射は、イヤッ！　お願い、その注射だけはしないで！」
自分の異様な痛みが、この注射に関係があることを察したのだ。普通なら、あまりの痛みとショックでそんな思考などできないだろう。泉のたぐい稀な聡明さが正確に事態を把握していることに驚くとともに、またまた湧き上がってくる興奮を覚えた。
泉は抵抗しようとするが、男たちに抑え込まれて身動きができな

い。朋子の注射器を持つ手が震えていた。
「こら、朋子、しっかりしろ！」
背中を叩くと朋子の震えが止まった。
「や、やめてぇえぇぁあああっ」
薬が泉の静脈へ入って行く。すぐに脳まで届き効果が表れる。
「いやあぁあえぇぁあえぇえあああぁぁあ」
薬の効果が少なくなると言葉を発する余裕が生まれるらしい。追加投与の一つの基準として覚えておくことにしよう。
すでに、ネズミはクリトリスを挟むクリップと尿道に刺さるねじ釘、さらに肛門をふさいでいるアヌス栓から電線を変圧器につないで舌なめずりをしている。
苦しみに悶える泉の乳首から伸びる紐がフックにかけられ、天井へ向かって引き上げられていった。
「死なないでくれよ。泉ちゃん」と田中がつぶやいた。

第１９話　空中電気人形

二つの乳首だけで吊された泉は小さく震えていた。手足は自由に動かせるのだが、身動きをすれば、それだけテグスが乳首に食い込み激痛をさらに激しくさせるに違いないからだ。

千切れそうな乳首に、破裂しそうな内部から塩に焼かれる膀胱と直腸、千切られたクリトリス、爪が割られた足の親指、打ち続けられた身体、痙攣する臓器、一つだけでも失神してしまいそうな激痛に苛まれているのだろう。

「さあ、電撃を喰らわせますよ。食塩水でパンパンな膀胱は、さぞ電流がよく流れるでしょうね」

ネズミがそういうと変圧器のレバーをオンにする。

「ふぎゃあああああぁぁぁああぁ！」

じっと我慢をして動かなかった泉が足を跳ね上げ激しく身悶えた。乳首だけではなくタワワな乳房もねじれるようだ。

「まだ、クリから入った電流が尿道から抜けているだけです」とネズミ。

激しく身悶える泉は、激しいだけ激痛がプラスされていくため、さらに激しく身悶えることになる激痛のスパイラルに襲われていた。

「あぶっ！　あぐぶぶぶぅぅぅっ！」

口角から白い泡が流れる。眼球がひっくり返り白目を剥いたと思うとクリクリした黒目勝ちの瞳に戻ることを繰り返した。

「さあ、今度は、クリから肛門のデルドーへ電流を追加します。尿道の二倍の電圧をかけますよ」

ネズミが変圧器を操作する。

「ひぎゃあああああああああっ！」

泉の身体は逆エビ型にそり、天井へ向けて泡を飛ばした。

「肛門は脊椎に近いから、そっちへ反応が行ったな」と解説してや

る。
「いいね、いいね。今度は、膀胱から直腸へ高圧電流を流してみようか。途中に子宮と膣があるから、処女の子宮焼きが出来るかもしれない」
ネズミが電流の流れを操作すると、泉の足の動く方向が変わった。電流の流れる部位が変わると足の動きも変わるらしい。
泉は手を上にあげ、乳首を吊しているヒモをつかんで、身体を持ち上げようとする。泉の細い腕では、体重を持ち上げることは難しいだろう。それでも少しは乳首にかかる負担を少なくできるかもしれない。知的と言うより反射的な行為だった。
その腕を、田中とパンチが竹刀で打つ。
腕の握力がなくなり、滑り落ちると、体重に重力加速が加わり、乳首の傷を広げてしまう結果となった。
こうなると予想して、泉は、はじめからジッと耐えることを選んでいたのだろう。何気ない苦痛に対する反応にも知性が感じられる。しかし、反射とは恐ろしいもので、一度、理性がはじけると、腕を打たれることが分かっていても、ヒモに手を伸ばしてしまう。そして、打たれる。それが繰り返され、乳首から流れる血の量も増え続ける。
「今度は、膀胱から電流を入れて、クリと肛門から抜けさせるよ。電圧は四倍だ。クリトリスには負担が大きいかな」
ネズミは唾をとばしながら変圧器を操作する。
「ぎゃあああああっ！　あああっ！　ああああああふっ、ぎいいいいぃいぃいいいぃぃ」
泉は全身を硬直させる。暴れることも出来ないくらい辛いのだろうか。
「ジッとしていてもおもしろくないだろ！」
パンチが、泉の乳房を竹刀で打った。
「ひぎゃあああああっ」
さらに田中も乳房を打つ。

「もっと、悶えろ！　乳首が裂けるまで悶え続けるんだ！」
泉は乳首から噴水のようにピューッ、ピューッと血を吹き出させながら足をばたつかせたり腰をひねったり、空中で暴れるしかなかった。
「あーーーっ、ああ、あああ、あああぁぁあああーーっ！」
左乳首の傷口が裂けテグスが外れ、右の乳首だけでぶら下がる泉。口から泡を吹きながら、手で紐を掴もうともがくが、竹刀で払われるだけだ。
「あふっ、あぶぶぅっ！」
長くしなやかな脚を空中で躍らせながら、右乳首を中心に回り始めた。
「あうううっ、はあああああぁぁあああぁ」
「きれいだ！　きれいだよ！」
ネズミが、大声を上げながら電圧のダイヤルを回す。
泉の脚の動きが激しくなり、右乳首から血を噴出させながら床に落下した。
落下したからと言って、電撃が止むわけではない。泉は床の上でのたうち回る。
「ひゃぁぁぁっ！」
泉は、電気コードを両手でつかむと引き抜き、それをネズミの向かって投げつけた。割れ目から血尿が噴き出す。
「あ、あぶないじゃないか！　僕らが感電したらどうするんだ！」
ネズミが電源を切り、怒鳴る。
「ふぎぃぃぃぃぃぃぃぃっ」
泉は尿道栓をみずから強制的に引き抜いたので、ネジで切られた尿道粘膜が削られそこを通る食塩水と尿と血液の混合液に苦しみ悶えていた。
俺は、泉に駆け寄り、フトッチョに泉の脚を開かせ股間を見た。
クリトリスのクリップも外されていたが、クリトリス自体は無傷のようだ。アナル栓のコードは退く抜かれていない。悲惨なのは尿

道だけだった。
尿を出し切るのを待って綿棒に消毒薬を染み込ませて尿道に挿入した。
「きゃあああっ」
泉が小さな悲鳴をあげる。
「罰を与えよう！　もっと、酷い目に会わせてやろう」
電気拷問を中断されたネズミは、機嫌が悪いようだ。
「まあ、まあ、治療が先だ。そろそろ、昼食の時間だし、飯でも食いながら、午後のことも考えようぜ」
とネズミをなだめ、治療をつづけた。
「い、いやあぁぁっ」
カテーテルで、再び食塩水を膀胱に注入する。
一回り大きいねじ釘で栓をする。
裂けた乳首は接着剤で傷口を閉じ、一針縫ってやる。
コックのおっさんが料理を持って来てテーブルに並べ始めた。
「そろそろ、昼食にしようじゃないか」
神田さんが言った。

第２０話　血、血のワイン

折り畳み式のテーブルに白いクロスがかけられ、そこにワゴンに載せた料理が次々と運ばれて来た。脂がのったステーキ、新鮮な魚に野菜、フルーツ類が大皿に盛られていた。

「さて、みんな、何回も射精したので疲れただろう。たくさん食べて精力を回復しようじゃないか」

俺たちは拷問をしながらも、肉を食っていたのだが、二十代前半の食欲は十代と変わらず旺盛だ。しかも、目の前に精力を注ぎ込む最高の獲物が苦しみ悶えているのだ。食欲が湧かないわけがない。

フトッチョや田中は手づかみで、ステーキやサラダを口に運んだ。

「そんなに慌てないで、ゆっくりやろうぜ」

「早く食って、拷問を再開したい」

「ははは、泉ちゃんにも少し休んでもらおうよ」

泉は、床の上で、苦しみ悶えのたうち回っている。何もされていないとは言え、膀胱・直腸の中では食塩水が傷ついた粘膜を焼き、クリや乳首を裂かれ、足の親指は爪が割れ穴が開き、体中には竹刀で殴られた跡が痛々しくついている。

新たな拷問をされなくても十分、激痛に苛まれ続けているわけだ。

「ここに腰掛けて休んでもらおう」

神田さんが用意したのは三日月型のブランコだった。銀色の金属製で、三日月の尖った部分に鎖がつけられていて、それが天井の滑車に伸びていた。横から見ると三角形で、これに跨ると三角木馬のように頂点が食い込む形である。

クレセントサドルをブランコ型にした感じだ。

田中が泉の腕をつかみ、立ち上がらせようとしている。

「おらっ！　立てよ！　休憩時間だ！」

「い、いたぁっ！　い、いやあぁぁっ」

「休ませてやるって言ってるだろ！　立てっ！」
「や、やだぁぁあぁ！」
泉は新たな拷問の始まりだと思っているらしい。休憩も拷問も泉にとっては同じようなものだ。
泉は、田中とフトッチョに力ずくで立たされ、引きずられるようにクレセントサドルの元までやって来た。泉の脚と脚の間にクレセントを挟むと鎖を引き上げる。股間に迫る三日月の形状を見て、何をされるか悟った泉は悲鳴を上げた。
「や、やめてっ！　もう、耐えられない！　死んじゃう」
「黙れっ！　人の言葉をしゃべるとは余裕があるじゃないか。その上、少し休憩させてやろうって言うんだ。ありがたく、これに跨がって休みな！」
立ち尽くす泉の股間に三日月の峰が迫ると、「ちょと待て、よく見て見ろ」と神田さんがクレセントサドルを指さした。
三日月の峰の中央付近から細く鋭い銀色の針が一本つきだしている。五センチほどの長さだろうか。
「その針をクリトリスに突き刺せ。人の言葉など忘れるだろう」
神田さんが冷酷な声で言った。
「そりゃ、いい」
田中は針の先端を泉のクリトリスにあてがい、鎖を引き上げはじめた。
サドルがつり上がるにつれて、針がクリトリスに突き刺さっていく。
「はぁぁぁあぁぁぁあああっ」
針が奥深く突き刺さっていく痛みに続いて、三日月の峰が股間に食い込む。さらに尿道に刺さったねじ釘と肛門のアナル栓が押し込まれていく。
「あ、あああ、あああああっ」
脚の親指に開いた穴に細いワイヤーが通され、床に固定された。泉の脚が床を離れても、ずれ落ちないための配慮である。

さらに、拷問のじゃまになるので手首にベルトを巻き、天井から吊り上げる。
泉は万歳をする形でクレセントサドルに跨がり、足先は床を離れている形に固定された。
「あああああ、あああああああ、あああっ」
悶えようにも悶える自由もなく、苦痛にうめくしかない。
「どうだ、俺たちが料理を食べて精力を回復している間に、せいぜい休んでいてくれ」
田中がそういうと泉の尻とパーンと叩き、クレセントサドルをゆりかごのように前後に揺らせた。
「きゃあああぁぁあああぁっ！　あ、あうっ、あうっ、あああうううあうぅぅっ」
泉の悲鳴が倉庫全体に響く。
「良い声で泣くなぁ。合唱部だけあって、いくら悲鳴を上げても声も枯れないし、声優みたいな声だな」と俺。
「顔やスタイルだけでも十分なのに、声まで最上なのだからたまらないね」とネズミ。
「顔は清純派アイドル女優、上半身はグラビアアイドル、下半身はバレリーナ、声は舞台もこなせる声優みたいなものか」と神田さんがワインを口に運んだ。
「やっぱり、肉には赤ワインですね。泉ちゃんに乳を出してもらってひと味足してもらいますか」と俺。
「いくら、良い女でも乳はでないだろう」
「乳ではなく、血、血。血液の血。血、血です」
俺は泉の乳首をつまみピンバイス（精密ドリル）をつきたて指先で回し始めた。ドリルは微細の肉へんを削り出しながら乳首に潜っていく。針で刺したのでは肉が周りに押しのけられるだけなので、針を抜いてしまうとほとんど塞がってしまう。ドリルで肉片を削り出せば微細な穴だとしても開いたままに保たれるのだ。
「あああああっ、い、いたあああっ」

ピンバイスで三回ほど掘り穴をあけると、乳房を搾ってやる。
三つの穴から血がにじみ出てくる。それをワイングラスで受けた。
「どうです。グラビアアイドルのオッパイから搾った血血入りワイン」
「これは、良いな。鼻血がでそうだ」と神田さんは白い歯を見せた。
「俺も一杯くれ」「俺にも」「俺にも」
俺たちは、泉の血血入りワインで乾杯をした。
芳醇な赤ワインの香りにかすかに血の匂いが混じる。それが、この美少女の乳房から搾りだされた香りだと思うと、ペニスが勃起して痛むほどだ。
泉は乳首から血を流しながらすすり泣いている。
その声が、俺たちの食欲をそそり、興奮を呼んだ。

第２１話　月のゆりかご

俺たちは、肉に食いつき、魚を貪り食いながら、ワインを胃に流し込んだ。泉のうめき声が、午後からの拷問の意欲を掻き立てる。泉に対する虐待や、射精したい欲求を抑えると嫌でも食欲の方が増した。

三日月型のサドルにまたがった泉の脚は、ただでさえスラリとしているのに余計に長く見える。処女のマンコに食い込んだ金属の刃から血が流れ落ち、細かく震える下腹部は心持ち膀胱のあたりが膨らんで見える。乳首から流れた血の筋は、汗と共にマンコの谷に伝わって消え、それが太もも、すね、と伝わり、穴が開いた足の親指へと続き床に広がっていた。

苦しそうに吐息を漏らす小さな桜色の唇からは時折、白い歯がのぞく。頬を伝わる涙は枯れて、乾いた白い筋がつくと見苦しいので、定期的に朋子に目薬と差すように言ってあった。

「昼休みなのに、拷問されているのと同じだな」

と神田さんが泉を眺めながら満足そうにワインを呷った。

「俺たちのペニスも拷問している時と同じ状態ですよ。これでは休憩になりませんね」

「ちょっと、揺らしてみるか」

田中が泉の傍へ歩んでいくと、泉が「い、いやっ、こ、こ、こないでっ！」と声を振り絞るように叫んだ。

「そんなに怖がるなよ。今は休憩中だ。ゆっくり休めるように泉ちゃんの揺り篭を揺らしてあげよう」

「い、いやあああああああっ」

田中が三日月の端に手をかける。中世の拷問何回分もの苦痛にさいなまれ続けているにせよ、泉にとっては手を触れられていないという意味で休息だったのだろう。今、感じている苦痛以外に新たな

苦痛が加味されないだけでも安心できていたようだ。
田中が泉がまたがっているサドルを前後に揺らす。
「ぐ、ひぎぃいいぃいいいいいぃいっ」
クリトリスに深々と刺さった針に中身をつつかれ、皮肉に金属の峰が食い込んでいく傷みを想像するとペニスが痛いほど勃起する。しかも、俺が想像している以上の傷みであることは確実で、泉は白目を向きながら泡を吹き出した。
「あふっ、あふうぅっ……ゴホッ、ごぼぉっ」
泉は意識を失えずあえぐしかないだろう。
「こいつはたまらねえ……」
田中が泉の乳房にむしゃぶりついた。乳首から流れる血を直接吸っているのだ。おっぱい好きの田中らしいと思った。
「泉ちゃんが可愛すぎて、休憩にならないよ」
ネズミが左手にワイングラスを揺らしながら、左手でペニスをしごき言った。
「さっきは電気責めを中断されたから、昼休みに続きをやらせてもらうよ」
ネズミは射精するとグラスをテーブルに置き、変圧器を手に泉に近寄った。
泉の乳房から離れた田中が口から血を滴らせながら、「おおっ、電気流すのか」と声援を送った。
ネズミは三日月の角の部分に電極をつなげた。
「三日月に電流を流すけど、普通ならダメージを与えられない。電気は流れやすいところを通るからね。むき出しのワイヤーで出来た高圧電線に鳥が止まっても感電しないのは、鳥の体より、ワイヤーを流れる方が容易だからだ。三日月は金属製なので体の中には電流が流れない。だけど……」
ネズミの顔に満面の笑みが浮かんだ。
「……泉ちゃんの場合、クリトリスに針が差し込まれているし、尿道には鉄のねじ釘が刺さっているし、肛門には金属のデルドー栓が

押し込まれているし、さらに膀胱・直腸は食塩水で満たされているから、十分に体内を電流が流れるね」

泉は、口元から白い泡を滴らせながら、荒い息を整えようとするが肺が時折痙攣するらしく咳き込みながら泡を吹き出した。田中に吸われた乳房は血まみれになってしまっている。

「さあ、電撃が行くよ～っ」

ネズミは言うと、泉は跳ねたように悲鳴を上げた。

「ゴフッ！　ひぎぃいいいいっ、ひっぎいいいいいいいいいっ」

下腹部に電撃パルスを通されて、無意識に腰を振ってしまう。それがまた、苦痛を倍増させることになるのだ。

「電撃ってどんな痛みなんだ？」と田中。

「弱ければ、針を差し込まれたような痛みだよ。強いと釘かな～。釘や針を差し込まれて、関節部など神経の集まっているところでスパークするような痛みだそうだよ」とネズミは楽しそうに答える。

「今の泉ちゃんは、クリトリスや尿道から熱い針を何本も差し込まれ、膀胱、子宮、直腸を貫かれながら、針の先端が弾けるような痛みを感じているはずだよ」

「なるほど、そりゃ、たまらないな。だから、こんなに苦しんでいるんだ」

田中もフトッチョもペニスをしごく手の動きが速くなっている。

「電圧を上げていくと、針が釘に変わるよ。さあ、どうだ！」

「ぎゃあああああっ！　ひいっ！　ひぎゃあああああぁぁああああっ」

泉は限界まで足を伸ばされ固定されていて、ほとんど動けないはずだが、それが嘘のように腰をふり悶え続けた。

「ぎいいいいいいいいいっ！」

「気絶できないってすてきですね」

ネズミは、さらに変圧器のダイヤルをオーバーにひねる。

「ふぎいいいいっ、うげぇっ！　ゴボボボ、ぐえええぇっ」

「おいおい、あまりやり過ぎて泉ちゃんの心臓を止めないでくれよ。

俺は今、昼休みなのだから、働く気なんてないからな」とネズミの肩をたたく。

「ああ、ごめん。気をつけるよ……あ……、と、止まっちゃかも」

泉が頭を垂れ動かなくなっている。

「心臓は動いているみたいだ。かすかにだけど」

田中が泉の胸に耳を押しつけてグーサインを出している。

「失神しただけだろう。オピオイド拮抗薬の効果が切れたんだ。昼休みに入ってから追加していないのでね」と俺。

「なんか、優しくないか？」

「少しくらい休ませないと、ほんとうに死んでしまうじゃないか。このくらいの年齢の子は五分・十分休めばかなりの体力を回復できるものだ。俺たちが昼食を平らげるまで三十分くらい寝させておけば、そのあと、手加減無しで責めることができるさ」

「それもそうだな、俺たちも疲れてきているだろうからな」とパンチ。

興奮しすぎていて、疲れを感じないが、実際の疲労はかなりのものだろう。

「だいたい、みんな、射精のしすぎだろ。何発だしてんだ。少し休もうぜ」

と田中。

フトッチョに泉をクレセントサドルから下ろすよう言って、朋子に尿道と肛門の栓を抜き手当をしておくよう命じた。

床に下ろされた泉の尿道と肛門からは真っ赤になった塩水が噴き出し、血だまりのように床に広がった。

第２２話　昼休み

午後の拷問をやりやすくするために、つかの間の休息を泉に与えることにした。休息と言っても三十分程度であるし、意識もないので、目が覚めたときには拷問が開始されるために、泉の意識の中では、ずっと責め続けられているのと変わらないだろう。違うところと言えば、少しだけ拷問に耐える耐力が回復していたと言うことだけで、受ける苦痛の量は結果的に多くなっているのだからたまらないはずだった。

俺たちは、その間に泉を調査するときに手に入れた私生活の画像や動画を鑑賞しながら、午後の拷問に思いを馳せることにした。

ネズミがパソコンをプロジェクターにつなぎ、スクリーンに画像を映し出した。

背筋を伸ばしてゆっくりと赤い自転車をこぐ制服姿の泉。白いブラウスがまぶしい。友人とあいさつを交わしながら手を振っている。屈託のない笑顔に白い歯が光る。周囲に写っている人間の視線を観察すると、皆、泉を注目しているのがわかる。

泉とすれ違った後、振り返る歩行者。車のドライバーも泉に視線を向けている時間が明らかに長い。老若男女問わず、視線をとらえる美少女なのだ。

泉の通学路の交通量が、泉の通る時間帯だけ、異常に多くなるデータもあり、注目度の高さが認められていた。本人はそんなことには、全然気がついていないようで、一定の速度で自転車を走らせていた。

「泉ちゃんほどの美少女だと、通っただけで通学路が華やぐ感じがしますね」とネズミ。

「こんな子とすれ違ったら、その夜のオカズは、この子に決定というくらいじゃないのか。清楚で可愛い顔をしているだけじゃなく、

ブラウスを押し上げているオッパイがたまらない」と田中。
「次は体育祭の動画です。百メートル走ですね」
泉は髪を三つ編みにしてスタートラインに立っている。ショートパンツから伸びる白い太ももがパソコンを通してもわかるくらいにオーラをまとっているようにまぶしく光る。
ピストルが鳴り、泉と泉より少し背が高い細身の選手が抜け出した。初めは泉がわずかにリードしていたが、ゴール手前で細身の選手がわずかに早くテープを切った。
「惜しかったな」
「相手は陸上部の選手ですからね。泉ちゃんは、バストが揺れてそれを押さえるのに体力を使うので、五十メートルを超えたところから加速が弱くなりスピードを維持するだけになっています。陸上の選手は後半、まだ加速する余裕があったので、わずかの差で勝ちましたね。五十メートル走なら泉ちゃんが勝っていたかもしれませんよ」とネズミが分析する。
「女性らしい体つきが、スポーツには邪魔になるみたいだな。もっとも、専門の選手並の運動神経と体力を持っているのが泉ちゃんのすごいところだ」と感心して言った。
「次は球技大会のときの動画です」
バレーボールでアタックを打つ泉が移される。ジャンプ力があるので、角度があるボールが相手コートに打ち込まれた。
「オッパイは揺れているけどジャンプ力には影響がないようだね」と俺。
「いや、よく見て！　ネットとの距離が、このバレー部の選手より少し後ろで打っているでしょ。胸がネットに触れないようにやや下がってしまうんだよね」と田中。さすが、オッパイ好きは伊達じゃないと思う。
「クックックッ……美人で運動神経も抜群だが、ボインが弱点で専門職の部活連中には負けているってのも萌えポイントということか」
神田さんが満足げに目を細めている。

「次は水泳の授業ですね。スクール水着姿を望遠レンズで捕らえています」
「他の子と比べても一回り細い体つきなのが分かるね」
「うむ。県下一の進学校だけあって、自己管理がしっかり出来ていて太った生徒がいないが、その中でも飛び抜けてスマートだな」
「胸が大きいのは隠し切れていないのが、また、セクシーだな」
「尻も締まっていてうまそうだ」
だんだん、おじさんが入った感想が多くなってきた。
しかし、こんな姿を見せられたら、男子生徒の今夜のオカズは決まったようなものだろう。泉ちゃんは存在自体が、勉学に励む男子たちの障害になってしまっていると考えられる。泉ちゃんを処理することは、今後の日本の発展のためにも寄与するに違いない。性的な魅力がありすぎるのも社会的には迷惑なことなのかもしれない。
「これは、冬の制服姿です。こういう格好をしていると、聡明な感じに見えますね。事実、成績も上位なのですが」
「こんな聡明そうで清楚な少女の中身が、グラマーな肢体というのはたまらんな」
男子生徒も興奮して勉学に励めないだろうが、男性教諭だってどれだけ彼女を心の中で犯していたのかわかったものではないと笑いながら言うと、「今の時代、どれだけ彼女の画像や動画がインターネット上に出回っていたかデータはあるのか？」と神田さんがネズミに聞いた。
「ハッカーに調査させたところ、N高校の男子生徒の八十九％、女子生徒の五十六％、男性教諭の百％が彼女の画像や動画をプライベートに所持していたようです」とネズミ。
「アハハハハ、先生の方が見る目があるな。五十を越えたオッサンでも彼女の魅力に目をつけていたってことだ。これだけかわいいと女生徒にも人気があったことも解るな」
「泉ちゃんは、一日に何人の男に犯されていただろうな？」
「少なく見積もっても百人くらいか。毎晩、百人の男たちの妄想の

中で犯されたり、中には俺たちのようなヤツに拷問されたりしていたのだろう。まあ、これほど責めていたヤツはそういないだろうが」

一同に笑いが起こった。

「さて、そろそろ、休憩時間も終わりにしようか」と神田さんが言った。

朋子に付き添われながら、床の上に死んだように横たわっている泉を見る。血小板を点滴していた。

「血小板はどのくらい入った？」

「二百ミリリットルです」

「よし、良いだろう。オピオイド拮抗薬を静脈注射してやれ。そうすれば、何もしなくても全身の激痛で目を覚ますだろう」

朋子に命じると、田中が俺に聞いた。

「血小板って、血を止める成分だろう。用意がいいな」

「血を止めるだけじゃないぜ。細胞を活性化して、傷の治癒力をアップする成分でもある。大リーガーなどが行っているＰＲＰ治療って聞いたことがあるだろう。高濃度の血小板を患部に注射して痛んだ腱や骨を治すために行う療法だ。自己修復能力を飛躍的に高めるので、十五・六歳の少女に使えば最大限の効果が期待できるだろう。さすがにこんな短時間で傷を治すことはできないが、わずかの延命にはなるだろうしね」

「クックック……さすがに俺も、こんな治療をやりながら責めるのは初めてだよ。彼女には少しでも長く生きていてほしいからね」と神田さんがよだれを拭きながら言った。

第２３話　Ｔ字開脚逆さ吊り

眠ったように気を失っている泉の顔は美しかった。
「この子が死んだら、こんなに美しいデスマスクを作れるのかな」
とネズミがつぶやいた。
「残念だが、それは無理だろう。拷問の果てに死んだ人間は通常なら、意外と安らかな顔をしているという話だが、泉ちゃんはちがうね。苦痛の果てに死ぬ人間は脳内麻薬の効用で、苦痛が麻痺し快楽に変わっていくものだが、その作用を止める薬を使っているからな。オピオイド拮抗薬を使われて拷問されて死んだ人間は苦痛の顔のまま死ぬそうだ」と説明してやった。
「安らかな死に顔も美しいが、苦痛の表情のまま昇天するのはもっと興奮するな。死の瞬間まで、人類史上、最悪の苦痛を味合わせてやりたいからな」と神田さん。
俺は朋子に、泉を目覚めさせるように指示を出す。
朋子が泉の静脈に針を指し、少しずつ注射器のピストンを押し込んでいった。拷問用に調整されたオピオイド拮抗薬が静脈の中に注がれていく。やがて脳に到達した薬剤は、痛覚神経のレセプターに取りつき無効にしている脳内麻薬物質と置き換わり、痛覚を活性化させる。
美しく眠ったような美少女の顔がピクリと動いたかと思うと苦痛の表情に変わった。
「あ、あああっ！　ふぎゃあああああああっ」
泉の身体が一瞬跳ねたと思うと悶え始めた。
「まだ、何もしていないのに、酷い暴れようだなぁ」とフトッチョ。
「全身が痛めつけられているからね。その痛みが一斉に襲ってきたのだろう」
「あふっ、あああああっ」

三十分程度は意識が無かったであろうが、気を失ってから記憶がとぎれているため、激痛が連続して続いているように感じているかもしれない。

「眠っている姿も美しいけど、苦しみ悶えている姿はたまらねえな」とフトッチョは泉の尻を抱えると肛門にペニスを突き立てた。

「俺も！　俺たちだけ昼飯喰うのは不公平だからな」パンチが泉の髪をつかみ口にペニスをねじり込む。

フトッチョの下腹と泉の尻がぶつかり合う音が響く。

俺と神田さんは肩をすぼめ苦笑い。

「あまり、射精ばかりするなよ。まだ午後の拷問は始まっていないのに」

とワイヤーロープにベルトを取り付けながら言った。

フトッチョがペニスを抜き、パンチも満足げにはてたようだ。泉の身体は、どこの穴も男から精液を搾り取るのによくできているようだ。

「さて、泉ちゃんはクラシックバレエを習っていたので開脚なんてお手の物だろう」

俺は泉の足首にワイヤーが付いた革ベルトを巻いた。ワイヤーはそれぞれ反対側に設置された巻き取り機につなげられている。巻き取り機に達する前に、高さ一メートル半程度の支柱に取り付けられている滑車を通るようになっていた。

俺はネズミにサインを送る。巻き取り機のモーターが回りワイヤーが左右に引かれていく。泉の足首も左右に引かれ脚が開かれていく。

「あ、あああああっ、何を！」

「バレエのようにT字開脚をしてもらうよ。床の上ではなく空中でだが」

「や、やめて、無理です！」

物理的には可能だろうが、準備運動もなく、極度の緊張状態ではかなりの苦痛が予想できる。

泉の脚は左右に引かれ、どんどん開かれていく。
やがて、足先が床を離れた。泉の上半身は仰向けになり、尻も床から浮く。
「や、やめてぇぇぇっ」
泉は、このまま丁字の形で逆さ吊りにされることに気が付いたらしく身をよじって暴れるがどうにもならない。
背中が床を離れ、肩も浮く。
「あああああっ！」
頭も浮くと手を床に着け脚への負担を少なくしようともがくが、パンチが腕を蹴ってじゃまをした。
Y字型に逆さ吊りなった泉の脚をさらに左右に引いていく。
「あああああああっ、ひいっ！　や、やあああああぁぁあああぁっ」
泉の脚は百八十度に開き丁字型の逆さ吊りになる。
巻き上げ機のモーターはまだ音を立てている。
「あああああっ！　さ、さけっ、ちゃうぅぅぅっいいいいったあああぁああ」
モーターベルトの空回りが始まり焼ける臭いが漂ったところでネズミが巻き上げ機のスイッチを切った。
泉の身体は、脚を百八十度の限界まで開ききったところで逆さ吊りにされていた。
床から一メートル半の高さで、大股賑が開いた形で性器をさらしている。
「見ろよ。ここまでマンコを開き切って男たちの目の前にさらした女はいないだろ。さすが女子高生バレリーナは違うな」
泉の体からは汗が吹き出し、透明な玉になって流れ落ちた。
「見事なT字開脚だな」神田さんが微笑んだ。
「正確にはT字ではありません。わずかにY字になっているはずです」とネズミ。
「完全にT字にはできないのか？」
「はい、物理的には力のつり合い上、無理なのです。もし、完全に

T字になるようなら、股が裂けて内臓が飛び散ります。なぜなら、そうなると両足にかかる力が無限大になるからです。今はT字に見えますが、わずかにY字……しかし、何トンかの力が股間にかかっているはずです」とネズミ。

泉の性器は、大陰唇が左右に開かれ、薄ピンク色の小陰唇が露出させられている。透き通った汗が、産毛か陰毛かわからないくらいの細い体毛にを飾っていた。

「なるほどな。だから、これだけ汗をかいているのか」とパンチが竹刀を手にしながら言った。

「たまらねぇぜ」

パンチが泉の股間めがけて竹刀を振り下ろした。

乾いた音が響き、泉の悲鳴が上がった。

「ひ、ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

極限まで開かれた股間に、再度、竹刀で痛打する。

「あぎゃあああああああっ！」

「裂けちまいなよ。処女マンコがぁっ！」

三発目が炸裂する。

「ひぎぃいいいいいいいっ、あ、あああっ」

「おいおい、ほんとうに裂けてしまうぞ。もったいない」と田中。

「手加減なしっていうことだっただろう」とパンチが反論する。

「まあ、パンチの気持ちは解るが、もっと面白い拷問を用意してあるんだ」と俺は言った。

第２４話　処女膜拷問

「こんなに股を開き切って『どうにてもしてください』と言うような恰好をされては、生殖器内部を責めないわけにはいくまいに」と神田さんが言った。

「身体検査の時に見た彼女の処女膜。あの美しいくも儚い肉の襞をペニスや張り型で裂傷を負わせるだけでは面白くないでしょう。泉ちゃんの破瓜は、最大の苦痛の中で行われるべきでしょう」と言うとみんな唾を飲み込みうなずいた。

「ついに膣を責めるのか？　いったいどんな」と喉が渇ききったような擦れ声でフトッチョが言う。

俺は、朋子に用意させた小瓶を手にした。

「こいつは、フッ酸。世界で最悪の毒物と言われている。皮膚に付いただけで激痛が走るし、浸透力も強力で、皮膚についたら最後、骨まで染み込んで組織を破壊する恐ろしい毒薬だ。

昔、歯科医師がフッ化ナトリウムと間違えて、当時三才の女児の歯にフッ酸を歯面に塗布したことがあった。塗布された瞬間に女児が大騒ぎして暴れだした。当然だ。恐ろしい激痛だったろうから。そばにいた母親と助士が女児を押さえつけ、さらに塗布をつづけると、あまりの激痛に筋肉が痙攣し大人二人を跳ね除け二メートル飛びあがり、床の上で口から白煙を吐きながらのたうち回り二時間後に死亡した事件があった。

そのフッ酸を処女膜に塗布してやることにする」

「おいおい、そんなことして、一発で死んでしまうじゃないか。のたうち回るところは見たいが……」

「まあ、死なないまでも、膣や子宮は摘出しなけらばならないだろうな。下半身は麻痺してしまうだろう。しかし、そうならないような処置をするんだ。あらかじめ、治療薬であるグルコン酸カルシウ

ムを処女膜の付け根に塗布・皮下注射をしておくことにする。こうすることによって、処女膜以外を侵すことがないだろうからな」

「なるほど、丁字逆さづりの姿勢で、三才の女児が二メートルも飛び上がる激痛を処女膜に受けて、どうなるか見ものだな」と神田さんが言うと、みんな目を見開いて興奮しているのが伝わってきた。

俺は、しゃがみ込んで泉の顔を見た。

泉は全身を脂汗でぬらし、顔を赤らめながら喘いでいた。両足を何百キロの力で左右に引かれ極限まで広げられた股間の痛みに、身動き一つ出来ないため、息を吸るのすら辛そうだった。

俺は立ち上がると、小股賑を指で広げクスコを膣口に差し込み広げた。ヘッドライトの光で中を見ると、サクラ色の処女膜が息をするように震えている。

注射器にカルシウム液を入れ針で処女膜の根本に何カ所か注入し、膣壁と膜の間に柔らかい綿棒で塗布した。これでフッ酸の浸透は防げると考えられるが、人体実験したわけではないので、失敗すれば生体解剖の末、膣・子宮ごと切除、場合によっては背骨・骨盤が侵され下半身麻痺となるだろう。

それも彼女の運しだいである。失敗した方が死期が早まるので、彼女にとっては運がいいと言うことになるかもしれないと思うと口元に笑みが浮かんでくるのがわかった。

「準備は終わった。これより、塗布を行う」

ガラス綿棒にフッ酸を染み込ませ、膣口から中に進入させた。

柔らそうな肉芽に綿棒がふれた。

「ひっ！」

泉が一瞬、震えた。

さらに綿棒を処女膜の表面に這わし、フッ酸を塗っていく。

「ぎゃあああぁぁあああああああぁっ」

泉は上半身をねじり、股が裂けてもかまわないと言うような悶えっぷりを見せた。

「ひゃぎゃあああぁあああぁっ！」

今にも股関節がはずれるのではないかと思うほど、身体を左右にねじり暴れている。
「あげぇえええぇあ、グボッ！　ゲボッ！　ガッ、グボボボボッ」
口から吹いた泡が床に落ちる。白い泡が赤く変わっていた。
「あまりの痛みに、脳が内蔵を制御しきれず、胃か肺から出血しているな」と俺が言った。
「血を吐く女ってのは興奮するな！」
パンチが目を血走らせて叫ぶ。
上半身をいくら捻ろうが、左右に引かれた下半身はがっしりと固定されたままだ。俺は、さらにフッ酸を追加塗布する。
「ひ、ひぎゃあああっ、ぐげぇっ、グボボボボボッ！」
そのとき、鉄骨が折れるような音がすると同時に泉の左足が伸びたように見えた。
「ひぎゃあああああっ！」
左の股関節がはずれてしまったらしい。左脚の股関節が伸び今にもちぎれそうだ。
おもしろいので水に浮かぶ丸太のように外れた脚を百八十度回転させてやる。
「ぎゃあああぁぁあぁっ……ひ、ひぃっ、ふぎゃっ、ぎゃっ！　ゲボッ、ゲボッ」
泉は白目を剥くが、気を失えず、また黒目をクリクリさせたと思うと白目を剥くを、口から赤い泡を噴き出しながら繰り返した。
「こんな凄まじい処女喪失をみたことがないな」と神田さんは関したようにうなづく。
「まだ、処女を喪失したわけじゃないですよ。処女膜はまだ裂けていませんから」
「そうだな、しかし、もう処女膜を触るのも危険だろう」
「グルコン酸カルシウムをタップリ塗布してやれば大丈夫ですよ」
「じゃあ、章一君が一番槍でいくかい？」と神田さんが口角をゆがめながら笑う。

「望むところです。泉ちゃんの処女は俺が頂きますよ。その前に、右足の股関節も脱臼させてやりましょう」
フトッチョとパンチに泉の体を支えてもらいネズミに右脚に伸びたワイヤーを巻き上げるように頼んだ。
「ふぎゃあああっ！」
脱臼だけでも失神級の痛みだが、強制的にジワジワと引かれるのは地獄以上の苦しみだろう。さらに左足を横に回転させるようにねじってやる。
「あぎゃあああっあぁぁえええーっ！　グゲッ、、や、やめっ、ぎゃあああぁぁあぁ！」
グリッともゴリッとも思える大きな石が捻じり切られたのではないかと思われるような音が響き、泉の股関節が伸びた。
「ただでさえ、長い脚が、さらに長くなったな」
と冗談を言ったが、その声は泉に届いていなかっただろう。
心臓が痙攣を起こしたようで、悲鳴が止み体が小刻みに震えていた。
こうなると、床に一旦おろして、ＡＥＤによる電気ショックを与えなければならない。
「このまま、死なれては処女のまま昇天ってことになるからな」
二発目の電気ショックを食らわせたとき、泉の目が開き、同時に悲鳴を上げた。

第２５話　輪姦のはじまり

意識を取り戻し、床の上で悶え苦しんでいる泉の足首をフトッチョとパンチが押さえつけ左右に引っ張った。
「い、いやあああぁあっ！　い、いいいたいっ！　あああああっ」
股関節を強制的に脱臼させられた脚を左右に引かれているのだ。
俺は、フトッチョとパンチに百八十度捻るように言った。
「うぎゃあああああぁぁぁっ」
泉は口から血が混じった涎を流しながら悲鳴を上げる。
「この姿勢で、犯してやる。最高の処女喪失だろう」
「ひ、ひど……あああっ、い、いたぁぁあああああっ」
膣口をクスコで広げ、中をのぞき込む。
ライトの光を反射して、赤く腫れ上がった処女膜が線香花火の最後の雫のような光を放っていた。フッ酸が残っていたら、俺のペニスは切断もののダメージを受けてしまうだろう。念入りに観察し、念のためグルコン酸カルシウムを追加して塗布してやる。
リスクはできるだけ減らしたいと思った。こんな状態で挿入したことのある男はいないだろうから。
今まで、美少女を何人も陵辱し拷問してきた俺だが、破瓜をこんなに楽しんだのは初めてだった。自分がリスクを負っても犯してやりたいと思うほど美しく苦しんでくれる最高の美少女だと思った。
「あぐうぅっ！　あああああうう、い、いやあああああぁぁ」
フトッチョもパンチも泉の脱臼した脚をこれでもかと引っ張るので、上半身を捻り跳ね上げ悶えまくっている。そのたびに、豊かな乳房が弾みゆれ、早く犯してほしいと誘っているようだ。
俺のペニスは、フッ酸が残っていたときの不安より、苦しみに悶える泉の魅力に圧倒され痛いくらいに勃起していた。
俺は、大きく開かれた股間の中心部にある泉の陰部にペニスの先

をあてがうと体重をかけ沈めていく。亀頭の進入を阻むように収縮する膣口を簡単に突破し、内壁のざらつきを感じながら処女膜を押しのけるように裂きながら進める。

「い、い、い、や、たあああああたったやぁあああああっ」

いやなのか、痛いのか混ざったような悲鳴が泉の口から漏れる。

ペニスが半分も入ったところで子宮口に当たった。

俺は、かまわずに奥へ突き進めた。無理に膣を自分のペニスのサイズまで突き伸ばしてやる感覚が好きだった。

泉の膣の中では、腫れ上がった処女膜が裂かれ襞となってさらに痛みを発しているはずだった。俺は処女膜を破壊しつくそうと腰を動かし、膣を突きまくった。

「あぐぐうううぅぅぅっ！　ああ、あぁ、あぐうううぅぅぅっ」

ペニスの滑りがよくなってくるのは、裂傷を負った処女膜から流れ出る血が潤滑油になっているのだろう。それに負けじと締め付けてくる膣壁の圧力が、俺を上り詰めさせていく。

勢いよく精液を吹き出させ、さらにつづけてもう一回吐き出す。そして、もう一回。一瞬で三回分の精液を吐き出したが、まだペニスは硬く勃起したままだ。

泉の性器は、男の精液を搾り出すために最高のパフォーマンスを持っていた。こんな女を妻にしたら、さぞかし大勢の子供が生まれるだろう。その身体をぶっ壊すために責め続けるのがサディストにとって最高の贅沢だろう。

もっと、もっと、苦しんで、俺にもう一発、射精させてくれ。

俺は、はずれた股関節を容赦なく腰で突きまくる。

「あああっ、アぎゃあああぁぁあぁっ！　ゲボッ！　ゲホッ！　ぐえぇぇぇぇっ」

泉は逃れられない激痛に目を白黒させ、時おり、口から赤い泡を吹く。

泉の膣壁は波打つように俺のペニスを締め付け、弱まり、また締め付けてくる。苦痛が終わるには、早く俺の精液を飲み込めば良い

と本能的に分かっているようだ。いや、ただ苦痛で内蔵がのたうっているだけで、膣の本来の機能ではないのかもしれない。

そんなことはどっちでもよい。俺はさらなる高みに導かれるようにオーガスムのその先まで突き抜ける予感がした。この至福が永遠に続けばよいと思うのと同時に、絶頂の上の絶頂を味わいたいという望みの葛藤が頭の中で駆けめぐる。

俺は胸板で、泉の弾力のある乳房を押しつぶせとばかりに抱きしめ、腰を突き上げた。

そして、四発目の精液を放った。

失神しそうなくらい頭の中で快感が爆発した。

この瞬間、泉が死ねば良いとすら思った。

ペニスを抜いて立ち上がると、泉の膣口から、ピンク色の精液が溢れ流れた。

「ずいぶんとたくさん出したね」

「四発もやっちゃったよ」

泉は、全身を痙攣させて、白目を剥いて喘いでいた。顔は蒼白である。心臓が痙攣を起こしているのだ。意識があるのはオピオイド拮抗薬の効能だろう。ＡＥＤの電気ショックで心室細動を修正してやる。

「っふぎぎぃぎぃっ」

泉は逃れようと、自由になった脚をばたつかせるが、股関節がはずれているため、おかしな踊りにしか見えない。

「次は、俺に入れさせてくれ！」

誰とも無く泉の身体に男たちが群がった。

「きゃあああっ、こ、こなっ、うぎゃあああああああっ！」

容赦ない輪姦が泉を襲った。

パンチは泉の乳房を拳で打ちながら射精したようだ。田中は乳房を鷲づかみにして射精した。フトッチョはバックで犯した。

ネズミは、見ているだけで射精してしまった。しかし、すぐに精力が回復し泉を犯した。　一つ一つの凌辱の時間は短く、それだけ、

男たちが異常に興奮していることがわかる。　神田さんが入れようとすると、泉が再び心室細動を起こしたので、治療を行いオピオイド拮抗薬を追加投与させた。

治療しているだけで、俺は射精してしまった。

神田さんが泉の膣内に射精し終わると、俺たちは二回り目の輪姦の準備を始めた。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n8516er/

沖を行く船

2024年6月9日17時48分発行